福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集

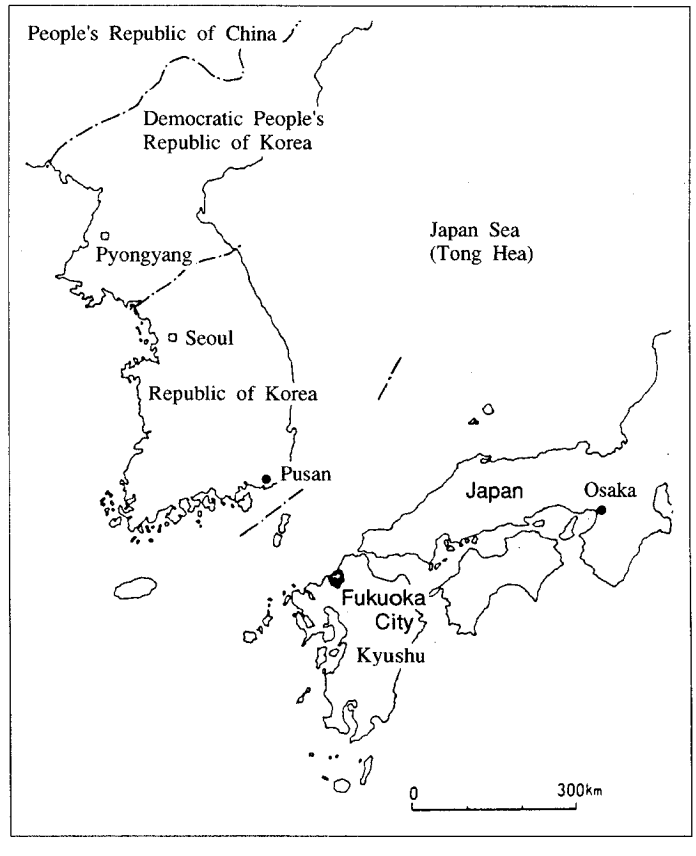
西新町遺跡4

ー西新町遺跡６・７次調査報告書ー

1996

福岡市教育委員会

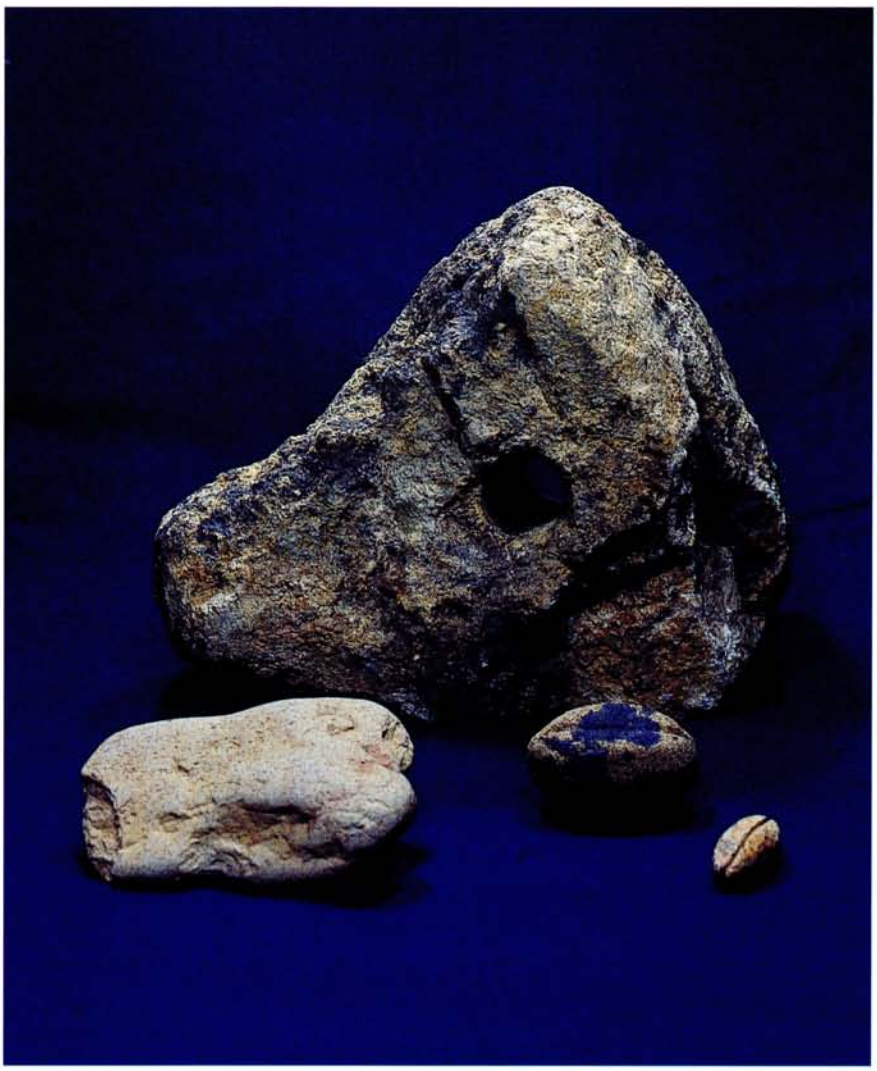
西新町遺跡4



遺跡略号　ＮＳＪ－６・７
調査番号　９３６４・９４１１

１９９６年3月
福岡市教育委員会

巻頭図版 1



西新町遺跡 6 次調査出土の石錘

巻頭図版 2

西新町遺跡 7 次調査区検出遺構（東より）

序　　文

福岡市西部に位置する早良平野は古来より先達の生活の場であったようで、緊急発掘によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

西新町遺跡は、これまでの調査によって弥生から古墳時代にかけての遺跡として知られてきました。ここに報告するのは民間のビル建設に伴って実施された埋蔵文化財の調査結果です。今回確認された遺構は弥生時代の墓域や集落の広がりをしめすもので、貴重な資料を得ることができました。なかでも住居跡や土坑から出土した鉄斧や石錘は、当時の交易や生業を知るうえで注目されます。

将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

１９９６年３月３１日
福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　　言

1．本書は、集合住宅の建設に伴って発掘調査した福岡市早良区西新に所在する西新町遺跡第６・７次調査の報告書である。
2．調査は、福岡市教育委員会を主体とし、1993年・1994年度に発掘調査、1995年度に整理作業を行った。
3．本書に使用する方位はすべて磁北である。
4．遺構の実測は、調査参加者で分担して行った。
5．写真撮影は、調査担当者のほか鉄斧の処理前の写真を本田光子がおこなった。
6．遺物の実測は、調査担当者がおこなった。
7．本書に使用した地図のうちFig.1は都市計画図、Fig.2は道路管理台帳をもとに作成した。
8．出土遺物とデータ類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
9．本書の編集・執筆は、常松が行った。

遺跡調査番号	９３６４	遺跡略号	ＮＳＪ－６
分布地図番号	７２－Ａ－１		
調査地地籍	福岡市早良区西新５丁目634-4外		
開発面積	1,０４１㎡	調査面積	６６７㎡
調査期間	1994年3月1日～94年6月15日		

遺跡調査番号	９４１１	遺跡略号	ＮＳＪ－７
分布地図番号	７２－Ａ－１		
調査地地籍	福岡市早良区西新５丁目53・54		
開発面積	３６８.９６㎡	調査面積	３００㎡
調査期間	1994年4月16日～94年5月22日		

本　文　目　次

第１章　調査の概要……1
第２章　西新町遺跡６次調査……4
第３章　西新町遺跡７次調査……18
第４章　まとめ
Ｓｕｍｍａｒｙ

挿　図　目　次

Ｆｉｇ．１　西新町・藤崎遺跡調査区位置図（1／１０,０００）……折込み
Ｆｉｇ．２　西新町遺跡６・７次調査区位置図（１／７５０）……3
Ｆｉｇ．３　西新町遺跡６次調査区遺構配置図（１／１２０）……4
Ｆｉｇ．４　西新町遺跡６次調査区土層図・上層検出遺構配置図（１／１２０）……5
Ｆｉｇ．５　６次調査区ＳＣ－０１，ＳＣ－０２遺構実測図（１／６０）……7
Ｆｉｇ．６　６次調査区ＳＣ－０３，ＳＣ－０４遺構実測図（１／６０）……8
Ｆｉｇ．７　６次調査区ＳＣ－０６遺構実測図（１／２０・１／６０）……9
Ｆｉｇ．８　６次調査区ＳＣ－０５，ＳＣ－０７遺構実測図（１／６０）……10
Ｆｉｇ．９　６次調査区ＳＣ－０８，ＳＸ－０９，ＳＣ－１０遺構実測図（１／６０）……11
Ｆｉｇ．10　６次調査区ＳＣ－０１，ＳＣ－０３，ＳＣ－０４出土遺物実測図（１／４）……12
Ｆｉｇ．11　６次調査区ＳＣ－０５，ＳＣ－０６出土遺物実測図（１／４）……13
Ｆｉｇ．12　６次調査区ＳＣ－０７，ＳＣ－０８出土遺物実測図（１／４）……14
Ｆｉｇ．13　６次調査区包含層・検出面出土遺物実測図（１／４）……15
Ｆｉｇ．14　６次調査区出土漁撈関連遺物実測図（１／３，２／３）……16
Ｆｉｇ．15　西新町遺跡７次調査区遺構配置図（１／１５０）……18
Ｆｉｇ．16　７次調査区１～４号甕棺墓実測図（１／２０）……19
Ｆｉｇ．17　７次調査区５号甕棺墓実測図（１／２０）……20
Ｆｉｇ．18　７次調査区ＳＣ－０１，ＳＣ－０３遺構実測図（１／６０）……21
Ｆｉｇ．19　７次調査区ＳＫ－０２，ＳＫ－０５，ＳＸ－０６，ＳＸ－０７遺構実測図（１／４０）…22
Ｆｉｇ．20　７次調査区１～４号甕棺実測図（１／６）……23
Ｆｉｇ．21　７次調査区５号甕棺実測図（１／６）……24
Ｆｉｇ．22　７次調査区出土遺物実測図（２／３）……24
Ｆｉｇ．23　７次調査区ＳＣ－０１出土遺物実測図（１／４）……25
Ｆｉｇ．24　７次調査区ＳＣ－０３出土遺物実測図１（１／４）……26
Ｆｉｇ．25　７次調査区ＳＣ－０３出土遺物実測図２（１／４）……27
Ｆｉｇ．26　７次調査区ＳＣ－０３出土遺物実測図３（１／４）……28
Ｆｉｇ．27　７次調査区ＳＫ－０２，ＳＸ－０４検出面出土遺物実測図（１／４）……29

Ｔａｂ．１　６次調査区出土遺物観察表……17
Ｔａｂ．２　７次調査区出土遺物観察表１……30
Ｔａｂ．３　７次調査区出土遺物観察表２……31
Ｔａｂ．４　出土土器の様相……32

第１章　調査の概要

調査の経緯

６次調査実施までの経緯は以下のとおりである。平成６年１月、野村不動産株式会社から教育委員会埋蔵文化財課に福岡市早良区西新５丁目643-4外における埋蔵文化財の有無について照会された。埋蔵文化財課では、該地が西新町遺跡群に含まれていることから、同１月19日試堀調査を実施した。試堀によって遺構の存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。協議の結果、調査は建築の工程上、93年度と94年度にかけて実施することになり３月から６月中旬にかけて調査を実施することで合意し、委託契約が結ばれた。表土持出しと調査事務所などの条件整備が整った後、発掘調査を開始し、契約期間内で調査を実施した。

つぎに７次調査実施までの経緯を以下に記す。平成６年３月、三井建設九州支店から教育委員会埋蔵文化財課に福岡市早良区西新５丁目638-9における埋蔵文化財の有無について照会された。埋蔵文化財課では、該地が西新町遺跡群に含まれていることから、同３月15日試堀調査を実施した。試堀によって遺構の存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。協議の結果、調査は建築の工程上、94年度当初に実施することになり、建築物の基礎工事を先行したのちに調査を実施することで合意し、委託契約が結ばれた。表土持出しと調査事務所などの条件整備が整った４月下旬、発掘調査を開始し、契約期間内で調査を実施した。

調査にあたっては委託者ならびに関係各位の高配を賜った。厚くお礼申し上げる次第である。

調査委託　　野村不動産株式会社（６次調査）

　　三井建設九州支店　（７次調査）

調査主体　　福岡市教育委員会　埋蔵文化財課

調査総括　　埋蔵文化財課長　折尾　学（当時）荒巻輝勝
　　埋蔵文化財第一係長　横山邦継
事前審査　　主任文化財主事　山口譲治（当時）
　　菅波正人（試堀）
庶　　務　　吉田麻由美（当時）西田結香
調査担当　　埋蔵文化財第一係　常松幹雄
調査・整理参加者　池田由美・伊藤ミドリ・井上ムツ子・牛尾秋子・牛尾二三子
　　衛藤美奈子・菊地栄子・古賀誠二・佐藤志津・末永　諭
　　惣慶トミ子・竹下裕子・鳥井原良治・原　美晴・平野義雄
　　藤野真紀・船越恒人・堀本歳四郎・松元恵美・柳浦八重子
　　山西人美・吉川順岳・脇坂レイコ

遺跡の形成と発見のあゆみ

西新町遺跡と藤崎遺跡は、博多湾に面して隣接する砂丘遺跡である。地質学の研究によると、砂丘の形成段階は、およそ３段階に要約できるという。

第一段階　今から三千五百年ほど前の縄文海進の最盛期には、藤崎遺跡の西側から海が入り込み、波による侵食をうけながら、一部では礫を堆積させた。
第二段階　砂洲が形成されるようになる三千年前頃になると、一段と陸地化が進んだ。
第三段階　その後、風成砂（風で運ばれてきた砂）が堆積するようになり、二千五百年ほど前には砂丘になる。風成砂の堆積は７世紀頃まで続いた。

また両遺跡における考古学的所見は、弥生時代の墓制や土器研究で重要な位置を占めている。主だった発掘・発見を以下にあげよう。

１９１２（明治４５）年、土砂を採集中箱式石棺を発見。棺内から成人骨と三角縁二神龍虎鏡一面、素環頭大刀一口が発見された。棺内には赤色顔料が確認されたとある。
島田寅次郎によりとして報告され、藤崎古墳などと呼ばれた。「藤崎の石棺」『史蹟名勝天然記念物調査報告書第一輯』福岡県、１９２５年

１９１７（大正６）年、箱式石棺から方格渦文鏡出土。
中山平次郎により、資料紹介と遺跡の概要を記した。藤崎石棺群と呼ばれた。「古式支那鏡鑑沿革（二）」『考古学雑誌第９巻第３号』考古学会、１９１８年

１９３０（昭和５）年、大正６年と同じ場所で、弥生時代前期の甕棺墓と副葬小壷、箱式石棺墓が出土。永倉松男・鏡山猛が調査し、遺跡の状況と甕棺の副葬小壷の実測図を示した。「筑前藤崎に於ける弥生式遺跡」『考古学第２巻第１号』東京考古学会、１９３１年

１９３０（昭和５）年、修猷館の運動場の東南端に近い明治通り沿いで電柱の立替え中に丹塗で蓋付きの甕棺が出土した。現在この甕棺は、東京国立博物館の蔵品となっている。永倉松男・鏡山猛「筑前國福岡市発見の甕棺」『考古学第１巻第５・６号』東京考古学会、１９３０年

昭和３０年代、旧藤崎刑務所内で工事中に弥生中期の甕棺墓が発見された。弥生終末期の標式とされる土器もこの辺りで出土した。森貞次郎は北部九州の弥生土器の編年について「弥生の下限を西新期より下げることはできない」と述べた。「九州」『日本の考古学Ⅲ』河出書房新社、１９６６年

１９７６～７８（昭和５１～５３）年、市営地下鉄の工事にともなって福岡市教育委員会が発掘調査。修猷館高校前の約５００mの区間で、甕棺墓３０基と弥生終末から古墳時代にかけての集落を調査。西新式土器の実態解明がすすむ。福岡市埋蔵文化財調査報告書第７９集、１９８２年

１９７７・７８（昭和５２・５３）年、市営地下鉄の工事にともなって福岡市教育委員会が発掘調査。藤崎交差点付近を中心に甕棺墓９１基、石棺墓４基、土壙墓２３基を調査し、弥生時代の集団墓地の様子が明らかとなった。福岡市埋蔵文化財調査報告書第６２集、１９８１年

１９７７（昭和５２）年、民間ビルの建設にともなう調査で、弥生前期の甕棺から碧玉製の管玉が出土した。

１９８０（昭和５５）年、藤崎バスターミナルの建設にともなう調査で、方形周溝墓の主体部から三角縁二神車馬鏡が出土した。福岡市埋蔵文化財調査報告書第８０集、１９８２年

１９８４（昭和５９）年、修猷館高校図書館改築にともなって福岡県教育委員会が発掘調査を行なう。古墳時代前期の住居跡から朝鮮半島南部から運ばれた土器がまとまって出土した。福岡県文化財調査報告書第７２集、１９８５年

１９９５年までに教育委員会によって、西新町遺跡は１０次、藤崎遺跡は２６次にわたる発掘調査が行なわれてきた。西新町遺跡８次調査で検出された住居跡は、弥生時代中期にさかのぼる集落の存在を明らかにした。西新町遺跡１０次調査では、頭骸骨のない人骨あるいは頭骸骨だけを収めた甕棺墓が発掘されており、「儀礼」・「戦闘」両面で検討されている。

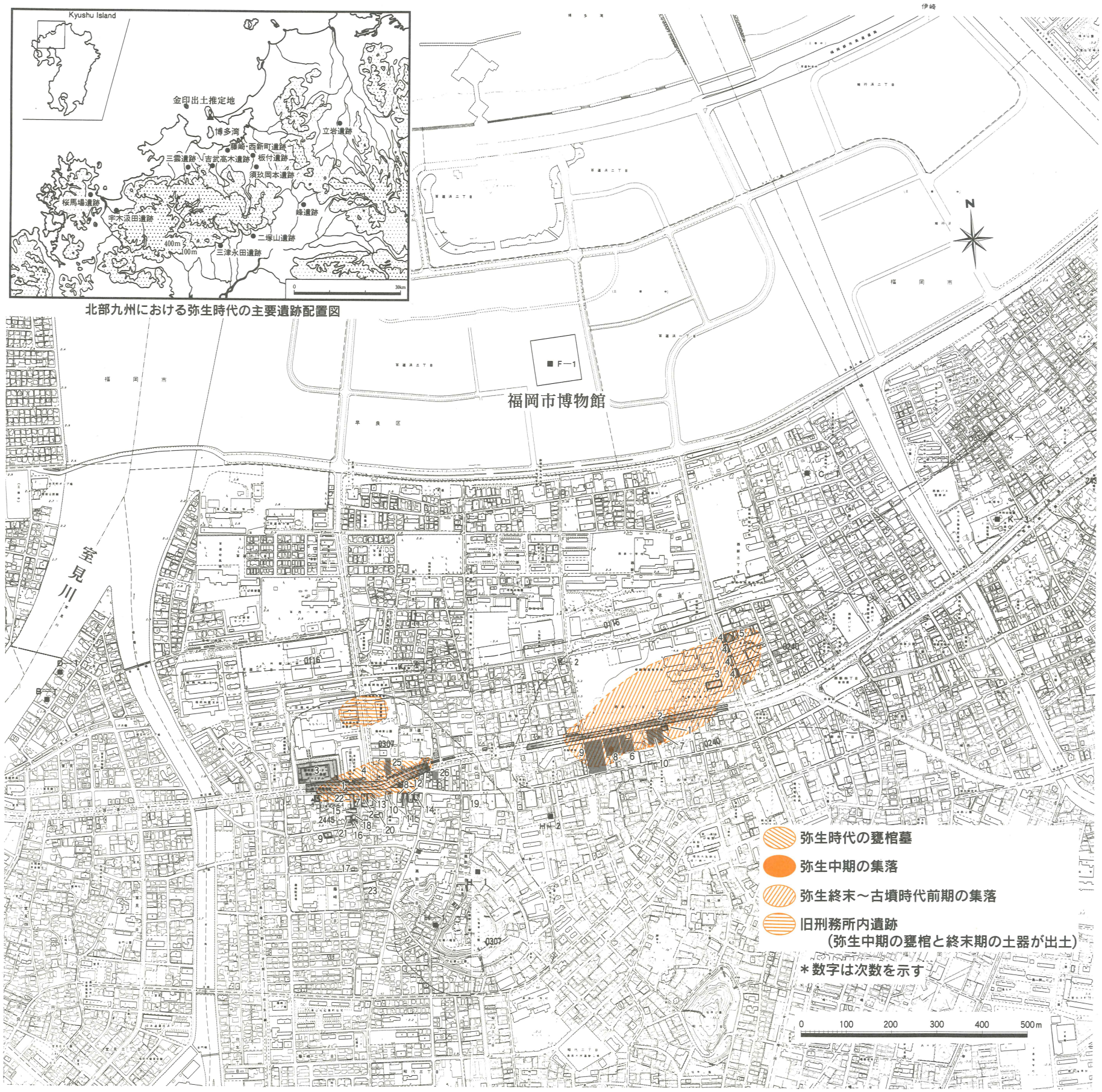


Fig.1　西新町・藤崎遺跡調査区位置図（1／10,000）

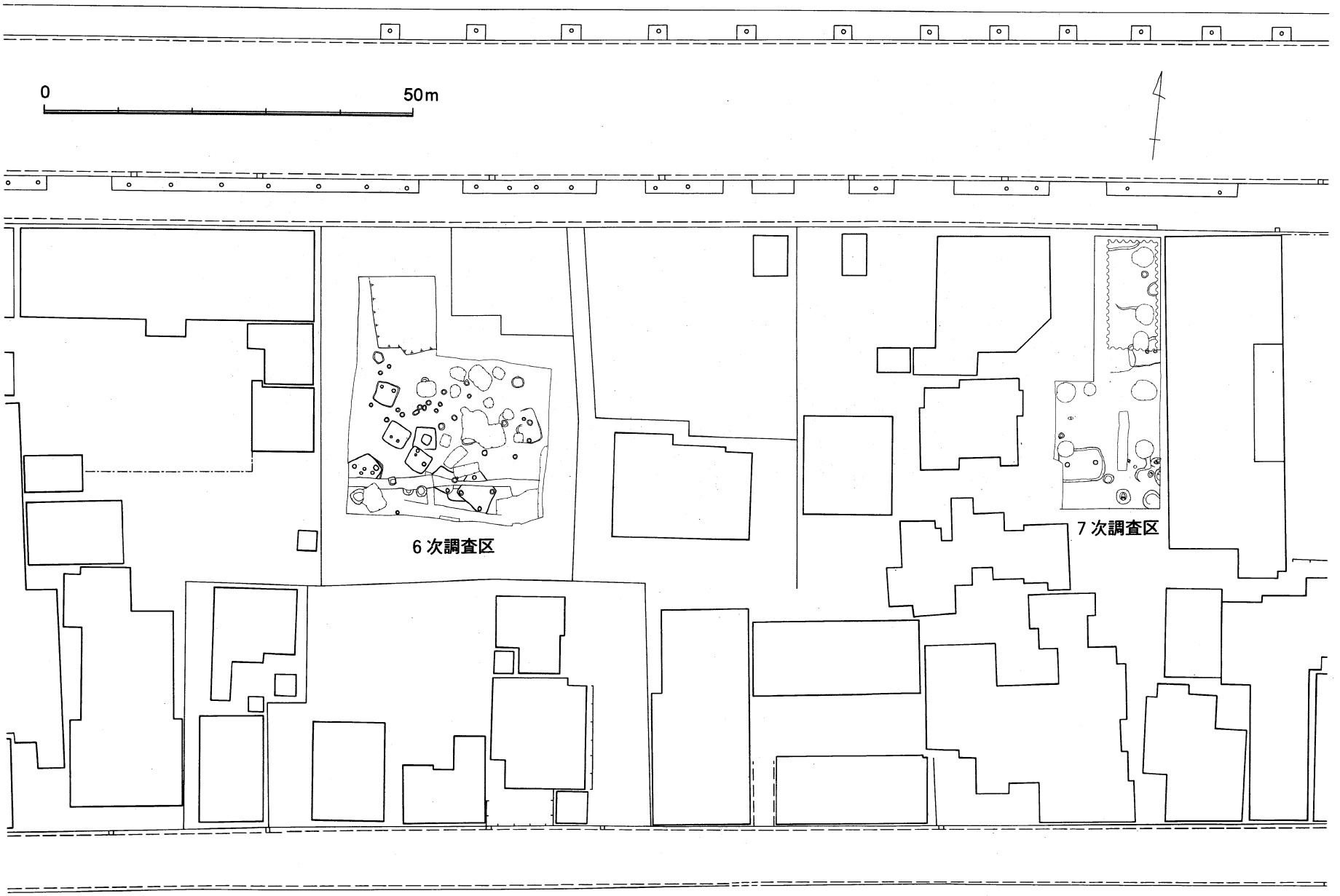


Fig. 2　西新町遺跡の6・7次調査区位置図（縮尺1／750）

第２章　西新町遺跡６次調査

６次調査区は、海岸線に沿って東西に延びる砂丘の南斜面に位置する。遺構検出面の標高は、４m前後である。侵入路付近は、構造物によって撹乱を受けていた。東壁と西壁の土層図からも明らかなように、風成砂からなる遺構面は、緩やかに南側に傾斜しているのがわかる。

Fig. 3　西新町遺跡の６次調査区遺構配置図（縮尺1／120）

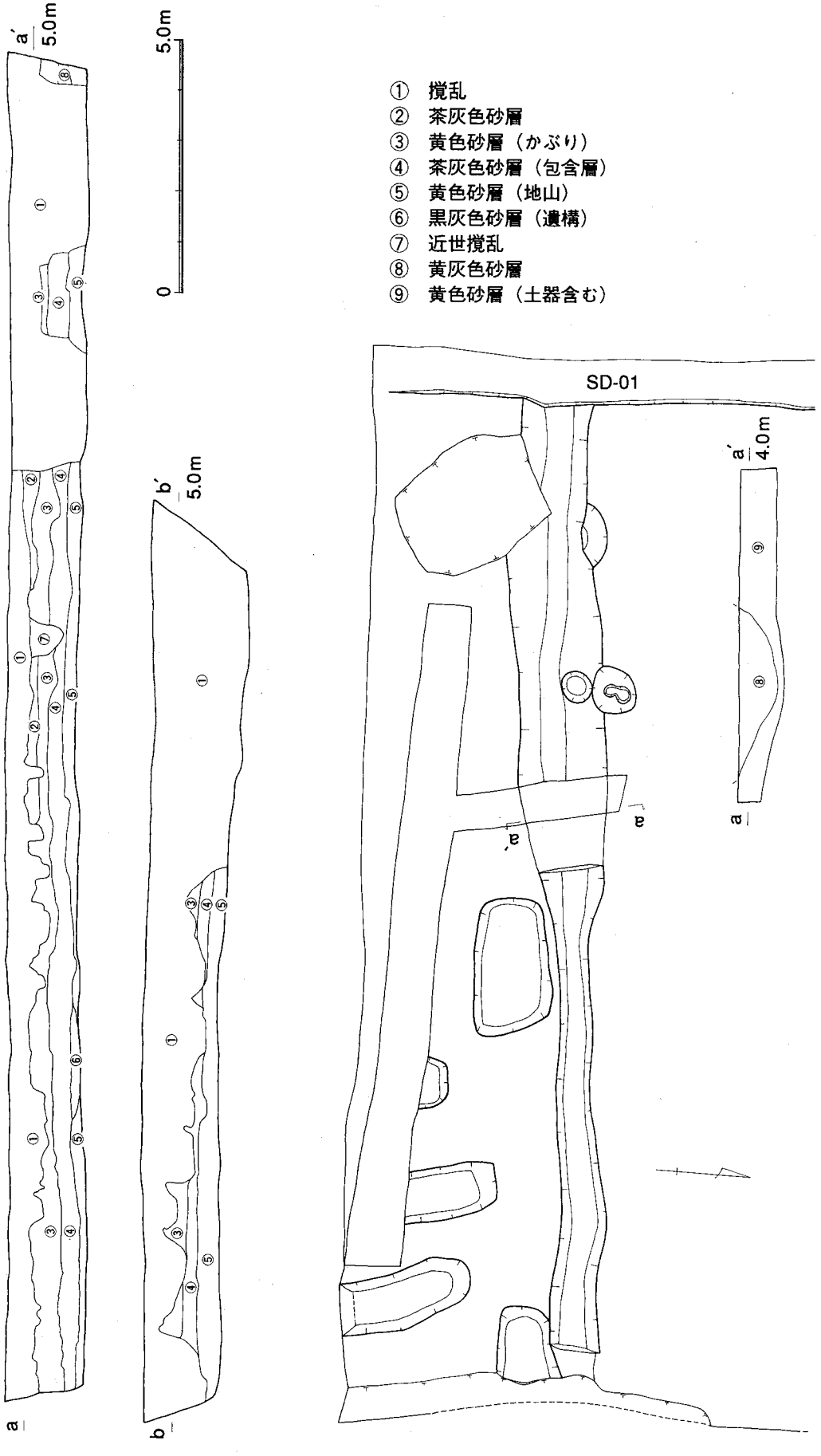


Fig. 4　西新町遺跡 6 次調査区土層図・上層検出遺構配置図（縮尺1／120）

遺構の分布　遺構検出を開始した当初、遺構プランは明瞭でなく、ようやく確認できたのは、東西方向にはしる１条の溝のみであった。溝は、Ｎ－９５°－Ｗの方位をとる。この溝は幅を１.９３～０.６６ｍと変えながら、西接する８次調査区においても確認されている。しかし時期が比定できるような遺物は検出されていない。

ＳＣ－０１　調査区東側で検出された。西側は撹乱を受けているが、隅丸方形プランの住居跡であろう。ａ・ａ´で４ｍあまりである。床面と壁面の上部との比高差は、約１５ｃｍ程度しかなく、かなり削平されている。柱穴は、３か所で確認できたが、ｂ・ｂ´の柱間が主柱穴となるかも知れない。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

ＳＣ－０２　調査区西側で検出された隅丸方形プランの住居跡である。長軸はａ・ａ´で２.８ｍ、短軸はｂ・ｂ´で２.６ｍをはかる。床面と壁面の上部との比高差は、約２５ｃｍ程度である。柱穴は、長軸上に２か所確認できたが、柱間は１ｍに満たない。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

ＳＣ－０３　調査区西側で検出された隅丸方形プランの住居跡である。一辺は２.７～２.８ｍをはかる。床面と壁面の上部との比高差は、２０～３０ｃｍ程度である。柱穴は、北側寄りで２か所確認できたが、柱間は１.５ｍほどである。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

ＳＣ－０４　調査区西側で検出された隅丸長方形プランの住居跡である。ＳＣ－１０を切っている。ａ・ａ´で４.０ｍあまりである。床面と壁面の上部との比高差は、約３０～４０ｃｍほどある。柱穴は、３か所で確認できたが、主柱穴は不明である。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

ＳＣ－０５　調査区中央部で検出された長方形プランの住居跡である。長軸は２.９ｍ、短軸は２.６ｍである。南東隅で長胴甕と鉢が横たわった状態で検出された。また北東隅の柱穴の上部で大型の石錘が出土した。柱穴は、遺物の出土状況を記録したのちに東寄りの短軸上で２か所確認できた。柱間は１.５ｍをはかる。柱穴の検出面と壁面の上部との比高差は、約６０ｃｍをはかる。遺構図では遺物の下面で確認された淡灰色の砂層をスクリーントーンで示した。

ＳＣ－０６　調査区南側中央で検出された。西南部は撹乱を受けて、規格は不明だが、短軸２.９ｍ程度の隅丸長方形プランの住居跡であろう。高杯が伏せられた状態で出土し、中央部の支脚が集中する部分の直下で不整楕円形状に堆積した焼土層を確認した。床面と壁面の上部との比高差は、２０～３０ｃｍ程度である。柱穴は、焼土下で２か所と住居の東西で２か所確認できたが、主柱穴は、不明である。

ＳＣ－０７　調査区南西側で検出された長軸４.０ｍ、短軸３.５ｍの隅丸長方形プランの住居跡である。南隅の柱穴の上部付近では、台付甕や長胴甕がまとまって出土し、土器の下に図のような位置で焼石が検出された。焼石付近の埋土には炭化物が多く見られたが、明瞭な焼土層の堆積や粘土などは確認できなかった。床面と壁面の上部との比高差は、１０ｃｍ程度である。柱穴は、それぞれの隅で計４か所確認できた。

ＳＣ－０８　調査区中央部で、高杯の受け部に鉢が入った状態で出土したことから住居の存在が明らかとなった。大部分撹乱を受けているため遺っているのは南西隅の一部のみである。

ＳＸ－０９　調査区の南西部で検出された不整円形の土坑である。溝に切られていた。覆土に炭化物を多く含んでいた。出土遺物は扁平な礫のみである。

ＳＣ－１０　調査区南西側で検出された一辺２.６ｍの隅丸方形プランの住居跡である。南西隅をＳＣ－０４に切られていた。床面と壁面の上部との比高差は、１５ｃｍ程度である。中央部に不整方形の落ちを確認できたが、柱穴は確認できなかった。出土遺物はみられなかった。

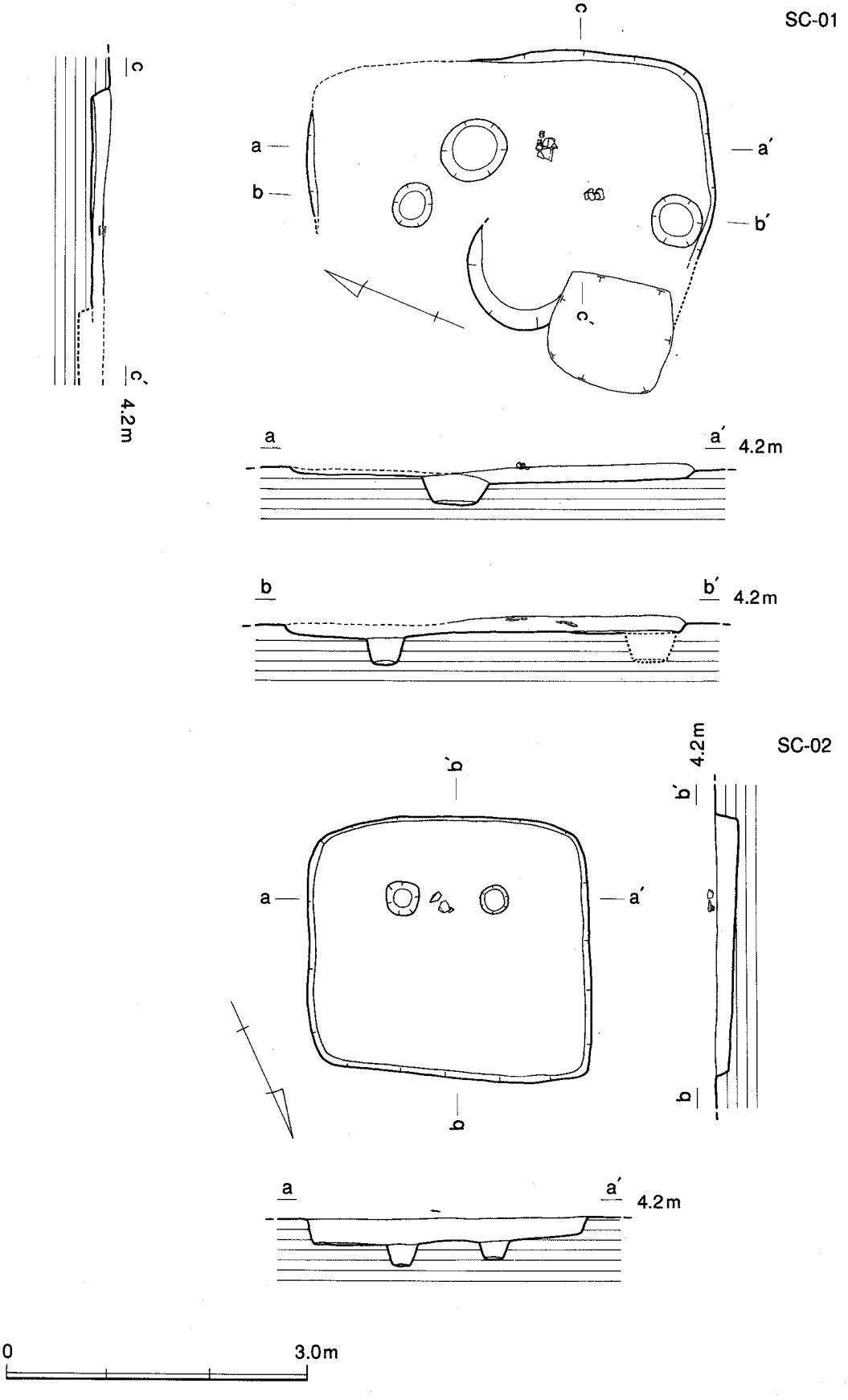


Fig. 5　6次調査区SC－01，SC－02遺構実測図（縮尺1／60）

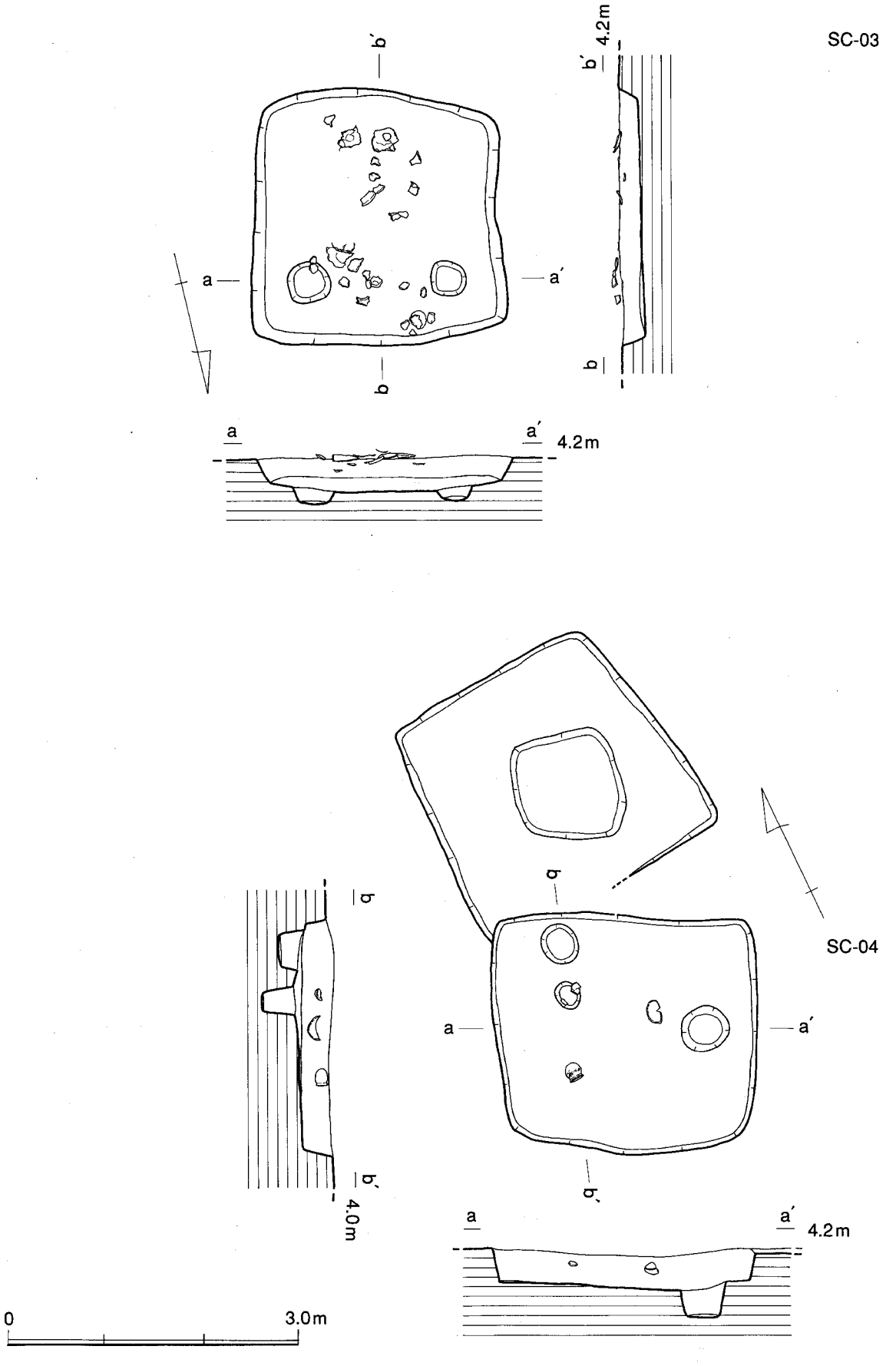


Fig. 6　６次調査区SC－03，SC－04遺構実測図（縮尺1／60）

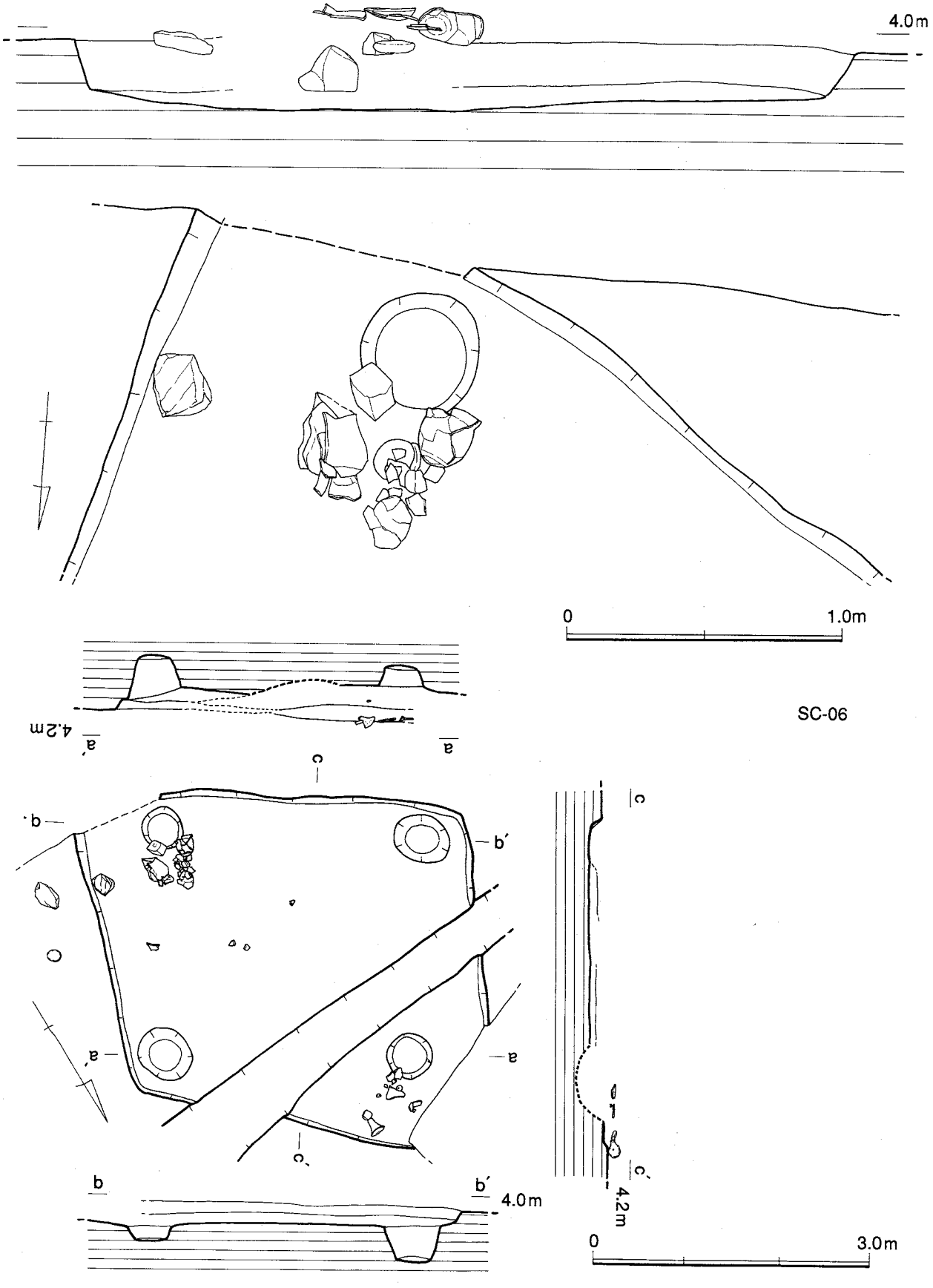


Fig. 7　6次調査区SC−06遺構実測図（縮尺1／20・1／60）

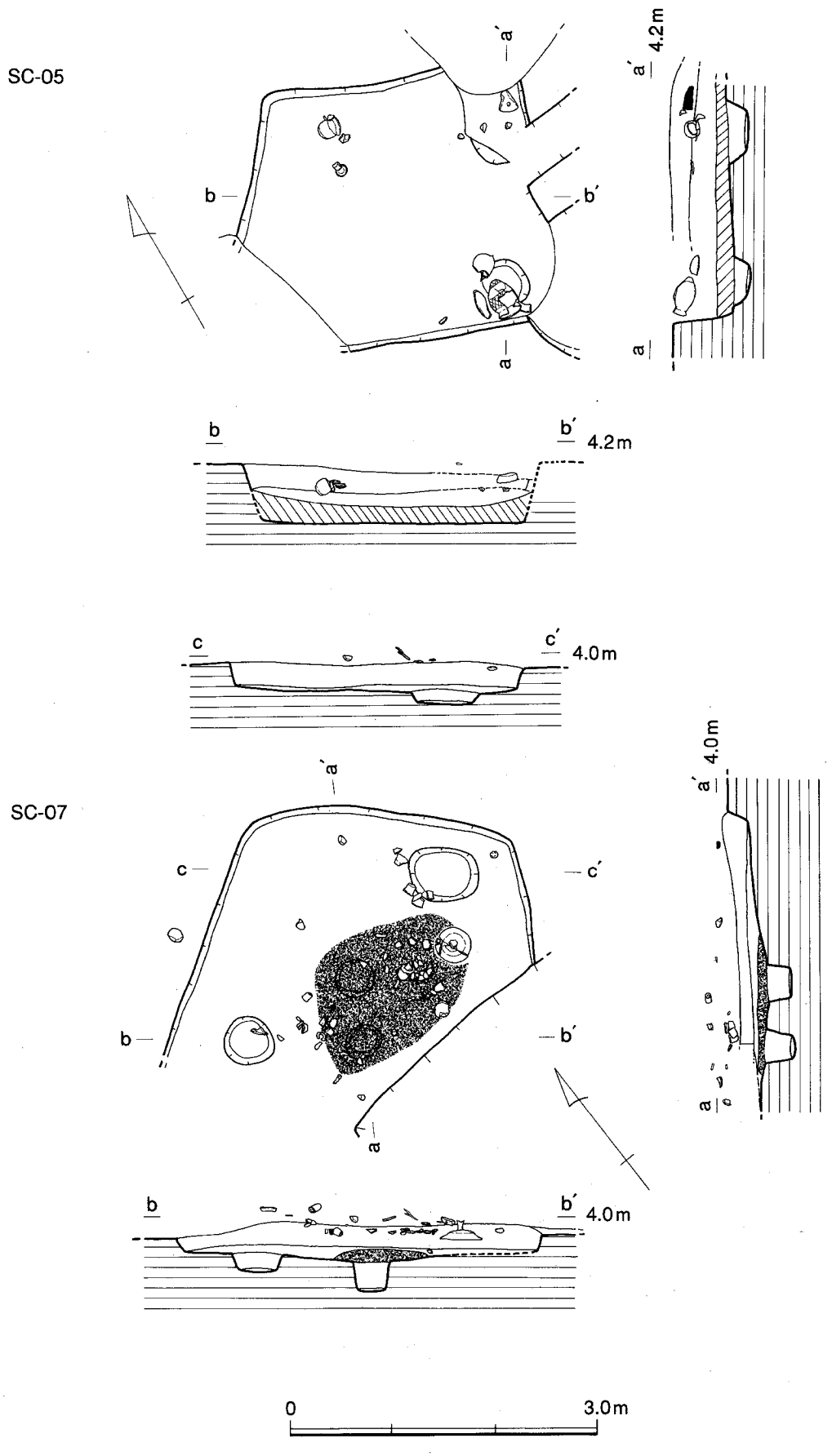


Fig. 8　６次調査区SC－05，SC－07遺構実測図（縮尺1／60）

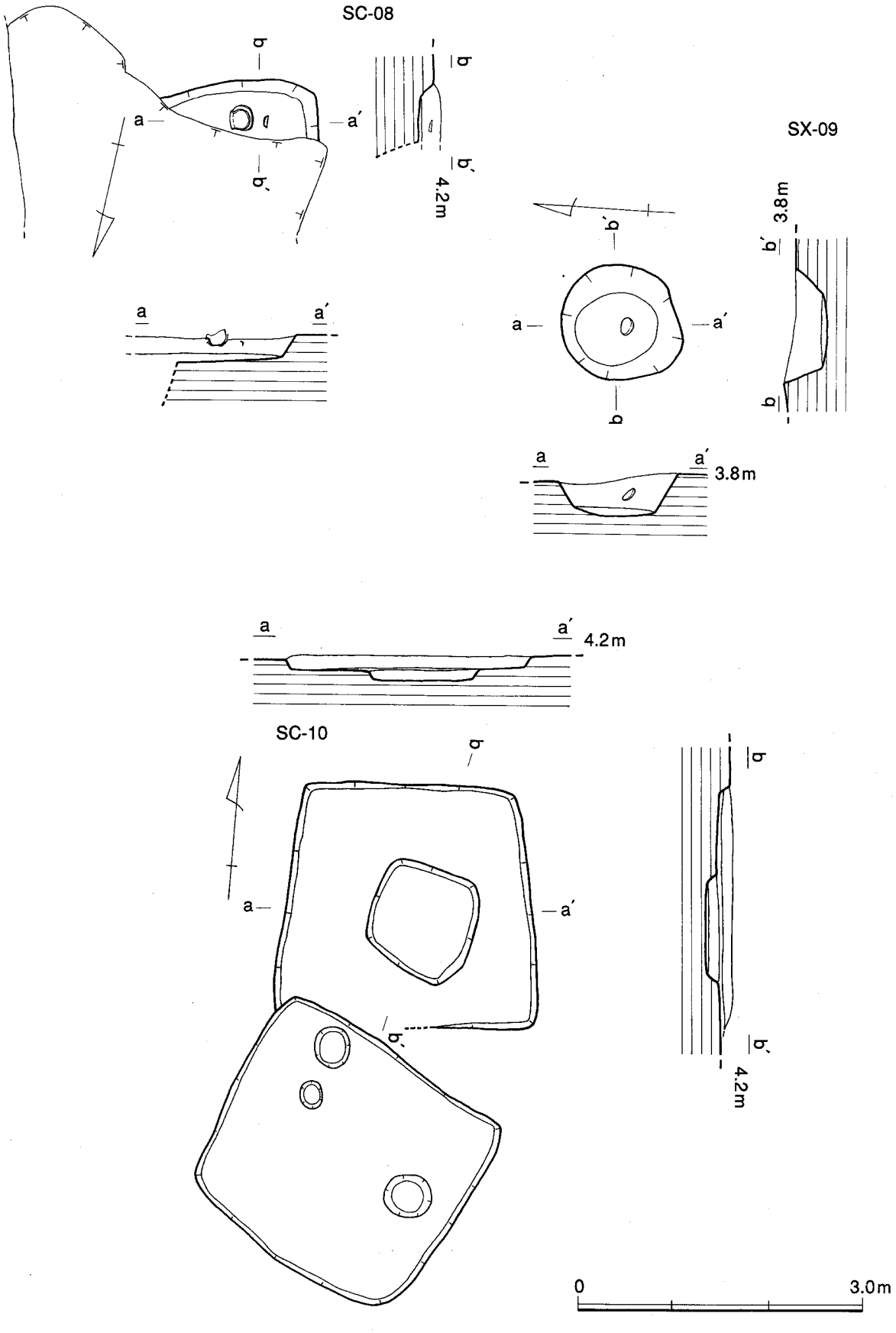


Fig. 9　6次調査区SC－08，SX－09，SC－10遺構実測図（縮尺1／60）

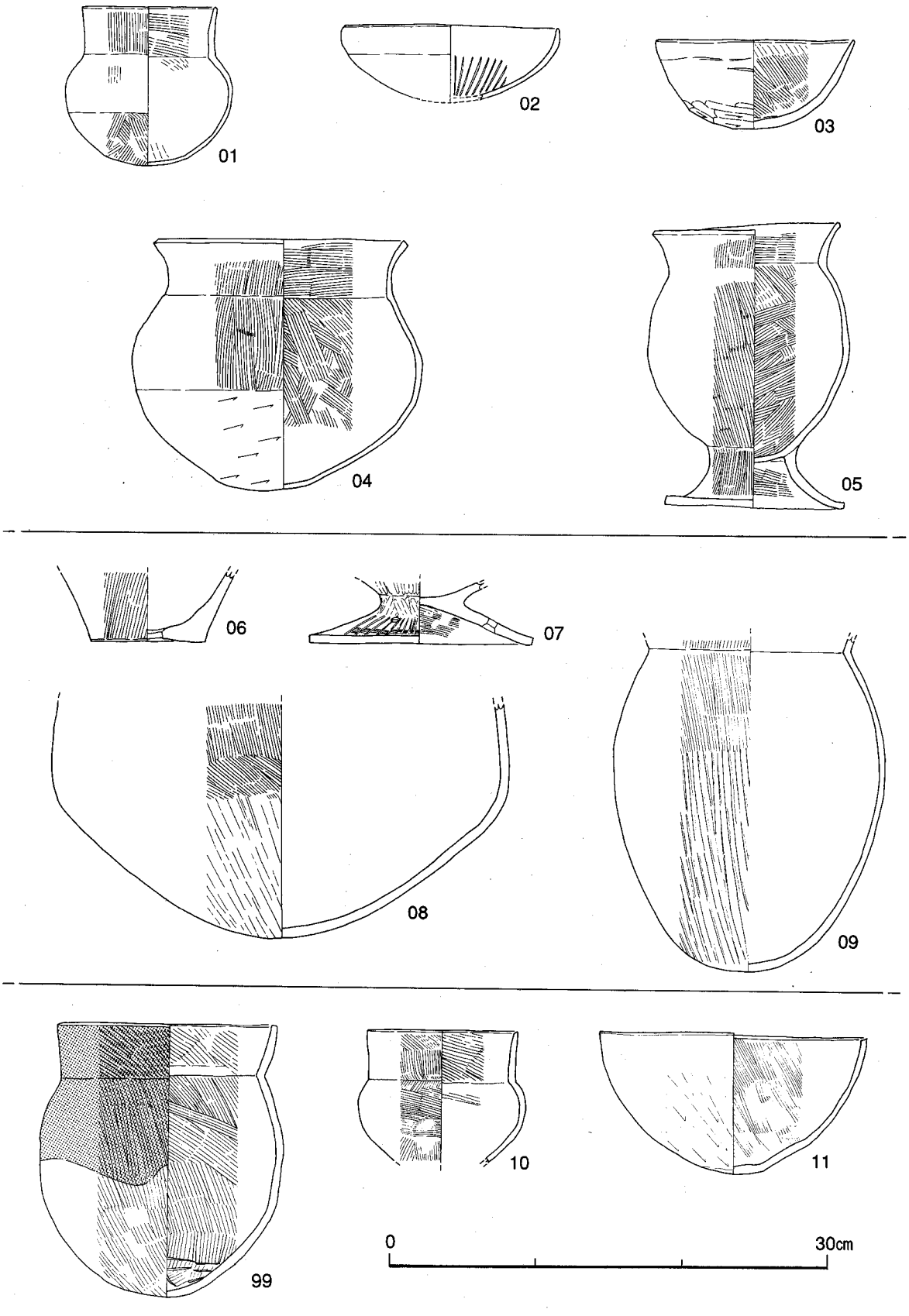


Fig.10　６次調査区SC－01，SC－03，SC－04出土遺物実測図（縮尺1／4）

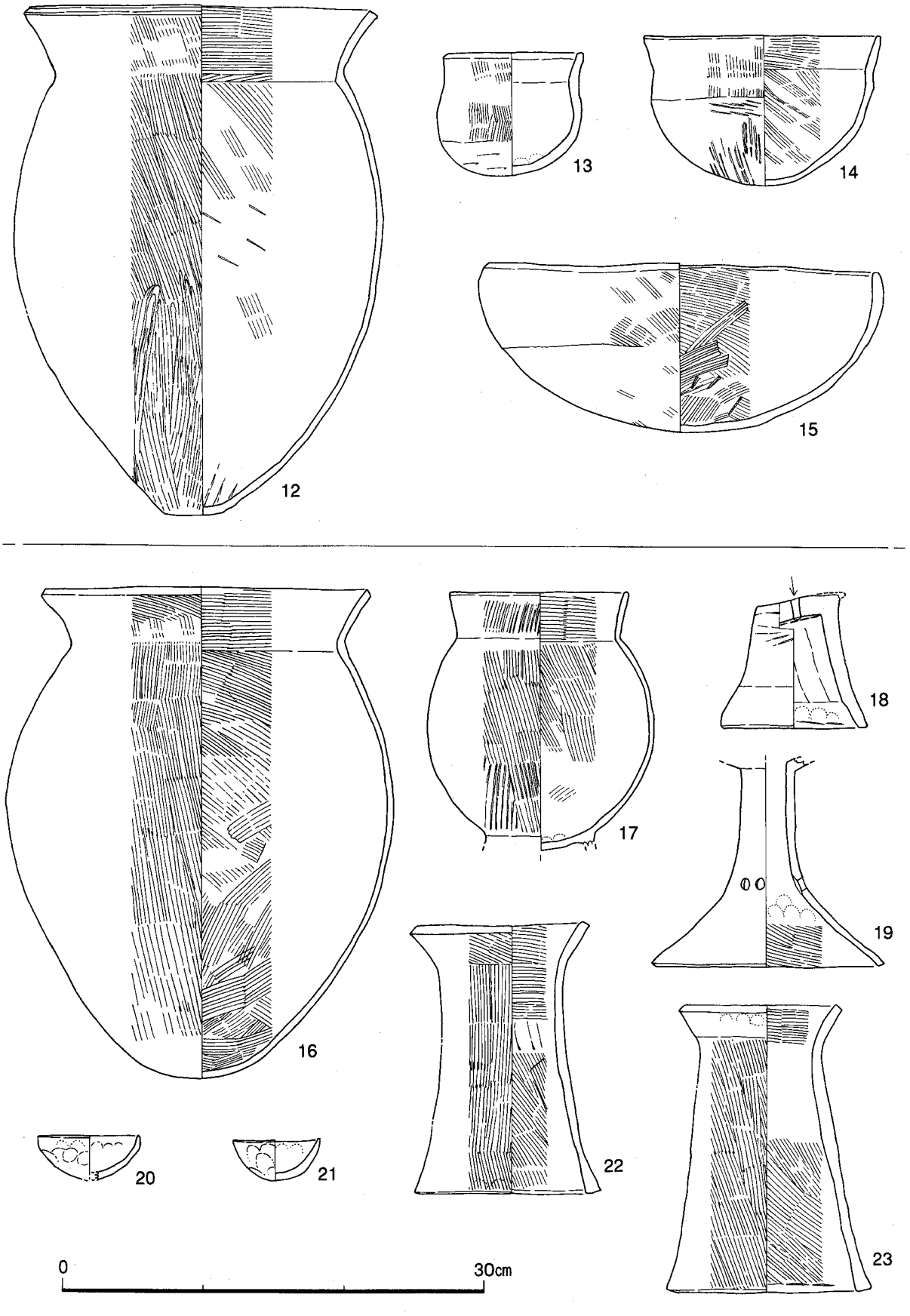


Fig.11　6次調査区SC－05，SC－06出土遺物実測図（縮尺1／4）

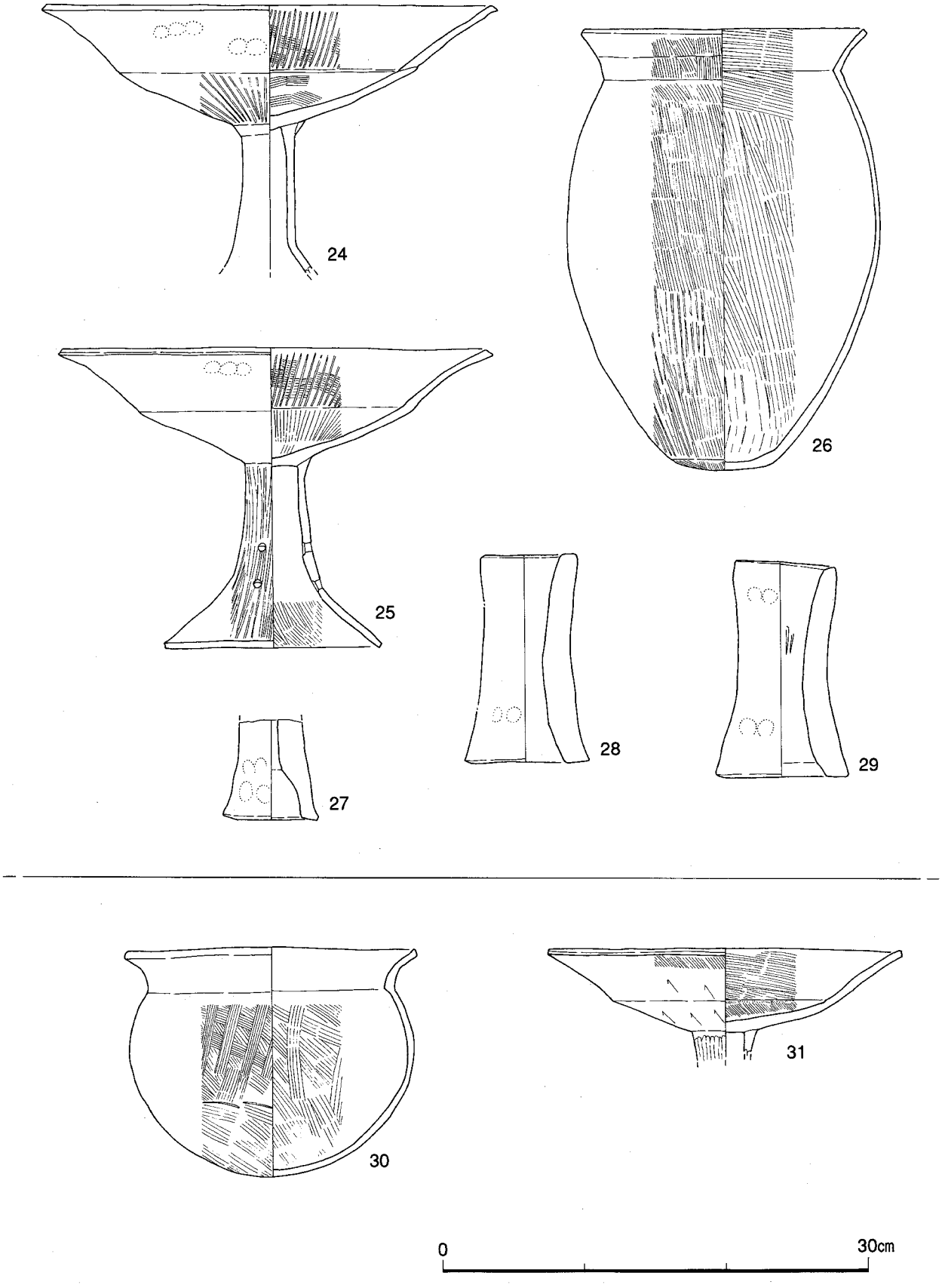


Fig.12　６次調査区SC－07，SC－08出土遺物実測図（縮尺1／4）

出土遺物　遺構検出面と住居跡出土の遺物について述べよう。遺物の時期は、弥生中期後半と弥生終末期に集中している。また今回図示しえなかったが、近世の陶磁器類も出土した。土器については観察表を参照されたい。ここでは漁撈関係の遺物である石錘についての所見を記す。

３９は、ＳＣ－０５の北東隅で出土した漁網用の大型の石錘である。黄褐色の三角形方柱形の自然礫に両面穿孔を施している。重量は4.３５kgをはかる。

４０は、遺構検出時に出土した石錘である。扁平な自然石の端部４か所を打ち欠いて紐を十文字に掛けられるように加工している。重量は１８０.５ｇである。

４１は、ＳＣ－０５出土の砂岩製の石錘である。ややずんぐりした紡錐形の体部を呈し、長軸に沿って溝が回る。重量は４４ｇである。

４２は、ＳＣ－０７出土の砂岩製の石錘である。紡錐形の体部をもち、長軸に沿って溝が回る。重量は８.５ｇと軽量である。

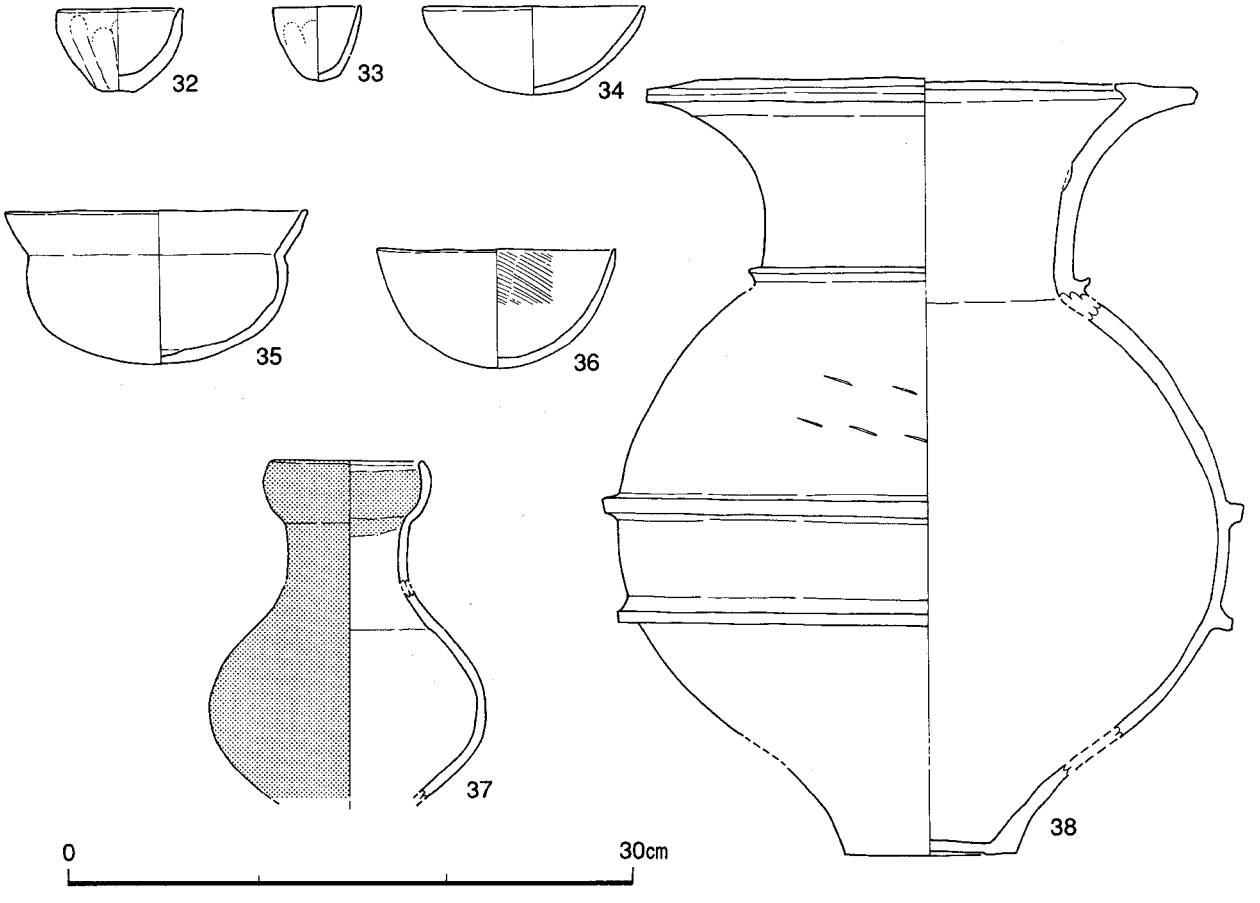


Fig.13　６次調査区包含層・検出面出土遺物実測図（縮尺1／4）

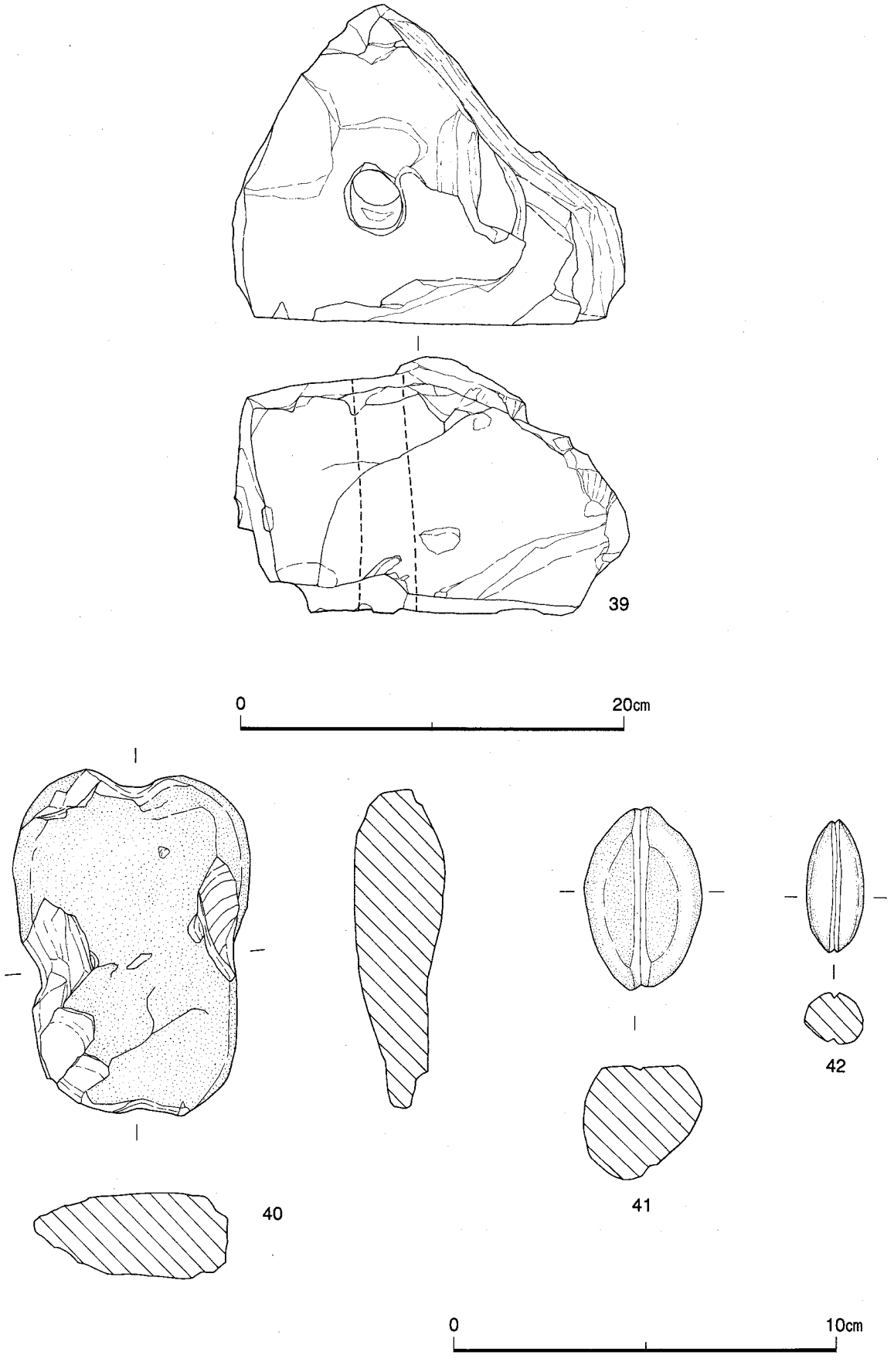


Fig.14　６次調査区出土漁撈関連遺物実測図（縮尺1／3，2／3）

番号	器種	遺構	サイズ①器高	②口径	特徴 ①色調 ②胎土 ③焼成 ④内面調整 ⑤外面調整	備考	登録番号
01	小壺	〃	①	②	①肌色②砂粒を多く含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目後なで		00102
02	鉢	〃	①15.6	② 5.4	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④横なで⑤横なで		00105
03	鉢	〃	①14.3	② 6.6	①褐色②石英等の粗粒を多く含む・雲母を微量含む③良好④ハケ目⑤なで～けずり		00104
04	壺	〃	①18.5	②18.2	①褐色②石英・長石の粗粒を多く含む③良好④ハケ目⑤ハケ目～ハケ目後けずり		00103
05	台付甕	〃	①	②	①黄灰色②粗砂粒を多く含む③やや軟質④ハケ目⑤ハケ目		00101
06	甑(底部)	SC - 03	①	②	①暗褐色②石英等の粗粒を含む③良好④磨滅が著しい⑤ハケ目～なで		00303
07	壺or鉢(脚部)	〃	①16.0	② 4.5	①褐色②石英等の粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目	穿孔あり	00301
08	大鉢？	〃	①	②	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④磨滅が著しい⑤ハケ目～なで		00302
09	長胴甕	〃	①	②	①褐色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④磨滅が著しい⑤ハケ目～なで		00304
10	小壷	SC - 04	①10.8	②	①暗褐色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00402
11	鉢	〃	①19.5	②10.2	①褐色②石英と長石の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目⑤けずり		00401
12	長胴甕	SC - 05	①25.0	②36.2	①褐色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで(磨滅)⑤ハケ目～なで	歪みがありうまく接合しない	00501
13	鉢	〃	① 9.3	② 8.7	①暗灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③やや脆弱④ハケ目後横なで⑤ハケ目		00504
14	鉢	〃	①17.0	②10.6	①肌色②石英・長石の粗粒を含み褐色の粒子を混入③良好④ハケ目後なで⑤なで		00503
15	鉢	〃	①28.0	②14.0	①茶灰色②石英・朝夕の粗粒を含み雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤けずり後なで	黒斑あり	00502
16	長胴甕	SC - 06	①23.2～23.8	②34.8	①淡黄灰色②石英や長石の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目	煤を付す	00601
17	台付甕	〃	①12.7	②18.3	①黄灰色②石英の粗粒を含む③やや脆弱④ハケ目⑤ハケ目	煤を付す	00602
18	高杯(脚部)	〃	①	②	①黄褐色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④しぼり～なで⑤タタキ後なで		00606
19	高杯(脚部)	〃	①	②	①肌色②細砂粒及び雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	対となった双孔を二ヶ所配す	00603
20	鉢	〃(含土)	①	②	①暗黄灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00608
21	鉢	〃(含土)	①	②	①暗黄灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00607
22	支脚	〃	①受12.8裾13.3	②19.2	①淡褐色②石英・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00605
23	支脚	〃	①裾	②20.3	①暗茶褐色②石英や長石の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00604
24	高杯	SC - 07	①	②	①暗黄灰色②石英の粗粒が斑で雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目後暗文、なで⑤暗文風(磨滅が著しい)		00702
25	高杯	〃	①30.5	②21.2	①茶灰色②石英雲母等の細粒を含む③良好④ハケ目後ヘラミガキ⑤ヘラミガキ～ヘラなで		00706
26	長胴甕	〃	①19.5～20.3	②31.3	①茶褐色②石英、長石、雲母粒を多く含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00701
27	支脚	〃	①	② 7.2	①淡褐色② ③良好④なで⑤なで	欠失後も使用したと思われる	00705
28	支脚	〃	①	②14.7	①黄灰色②石英、雲母の細粒を含む③良好④なで⑤なで		00704
29	支脚	〃	①	②15.3	①黄灰色②石英、雲母等の細粒を含む③良好④なで⑤なで		00703
30	鉢	SC - 08	①20.5	②16.3	①肌色②石英、長石の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで⑥ハケ目		00801
31	高杯(皿部)	〃	①25.0	②	①褐色②石英、雲母の粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後ケズリ		00802
32	鉢	包含層	①	②	①褐色②雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00906
33	鉢	包含層	①	②	①褐色②雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00905
34	鉢	包含層(8区)	①	②	①明褐色②石英等の粗粒をわずかに含む③良好④なで(磨滅が著しい)⑤なで(磨滅が著しい)	手づくね	00902
35	鉢	包含層	①	②	①淡褐色②雲母の細粒を含む③良好④研磨⑤研磨	内外面丹塗り	00907
36	鉢	包含層(8区)	①	②	①黄灰色②雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤なで		00901
37	壺	検出面(6区)	①	②	①明黄褐色②雲母等の細粒を含む③良好④研磨⑤研磨	内外面丹塗り	00903
38	壺	検出面(1区)	①29.2	②41.3	①明淡灰色②石英等の粗粒を含む③良好④磨滅が著しい⑤ハケ目後横なで	内面に小動物の牙痕がある	00904
99	壺	SC - 04	①19.5	②15.8	①黄灰色②石英等の粗粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目	内外面上半に煤を付す	00403

Tab.1　6次調査区出土遺物観察表

第３章　西新町遺跡７次調査

遺構の分布　調査区内の砂層上面の標高は４ｍ前後で、最も高い部分で４.４７ｍである。中央部に井戸による撹乱がある。遺構形成時の旧況をはかる目安として１号甕棺の表面にみられる小動物の牙歯痕跡は、甕棺の一部が露頭した時期があったことを示唆するものである。また比較的遺存度のよい３号住居跡の掘形の状況をみると、大変締まりがよく、当時の生活面に近いものと考えられる。したがって遺構が形成された弥生時代中期後半から弥生時代終末にかけても、砂層の上面は、４ｍを若干上回る程度で推移したと推定される。

検出された５基の甕棺墓は、すべて調査区の南側に分布していた。集団墓としての甕棺墓は、東接する１次調査区で小児甕棺、北東部の２次調査で成人用甕棺と小児甕棺の分布が確認されていた。このため墓域は南側に移行するにつれて縁辺の様相を呈すると理解していたが、西接する１０次調査区で成人棺を含む甕棺墓約３０基が、調査されるに及んで再考を迫られることになった。

甕棺墓

Ｋ－０１　調査区の最も北で検出された小児甕棺墓である。接口式で、埋置方位はＮ－８４°－Ｅ、埋置角度は３３°である。下甕に穿孔がみられる。墓壙の掘形は不明である。

Ｋ－０２　調査区の南東部で検出された小児甕棺墓である。上甕に胴部上半を打ち欠いた壺を用いている。呑口式で、埋置方位はＮ－３７°－

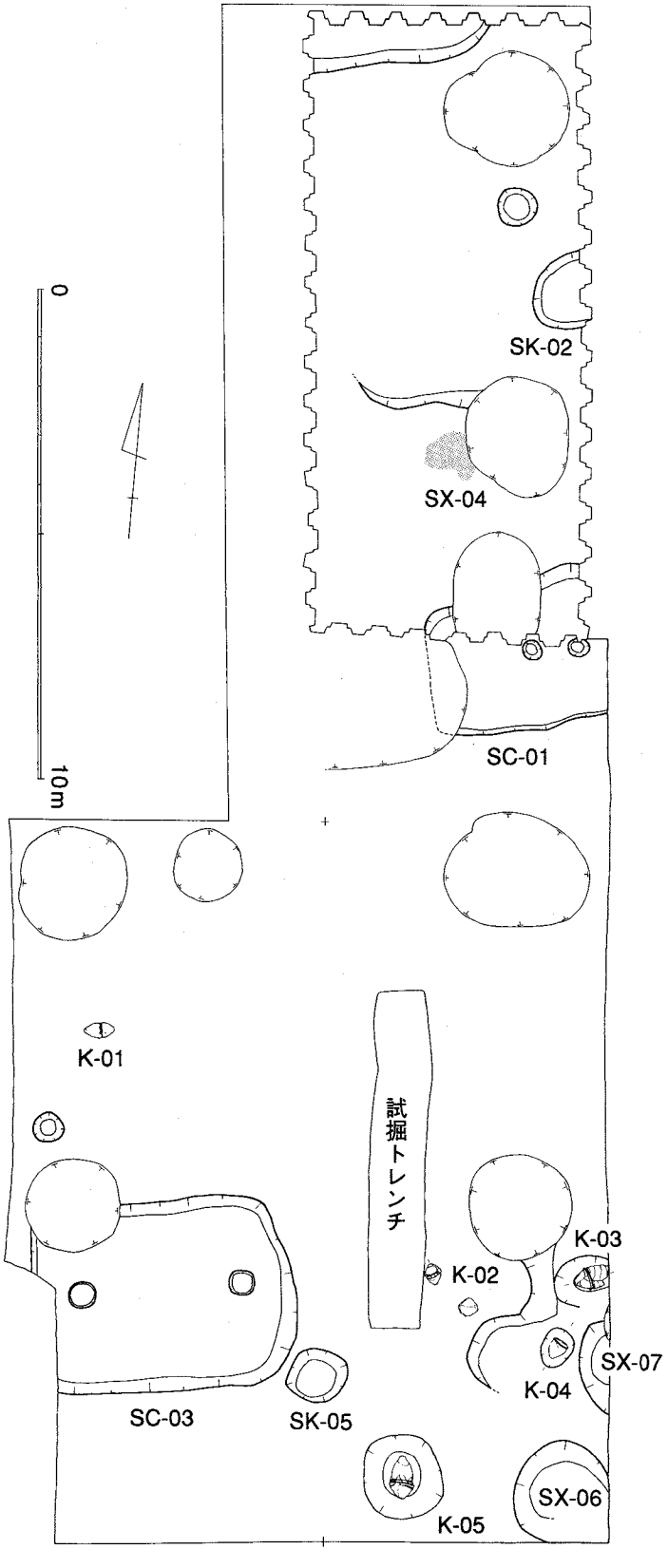


Fig.15　西新町遺跡７次調査区遺構配置図（縮尺1／150）

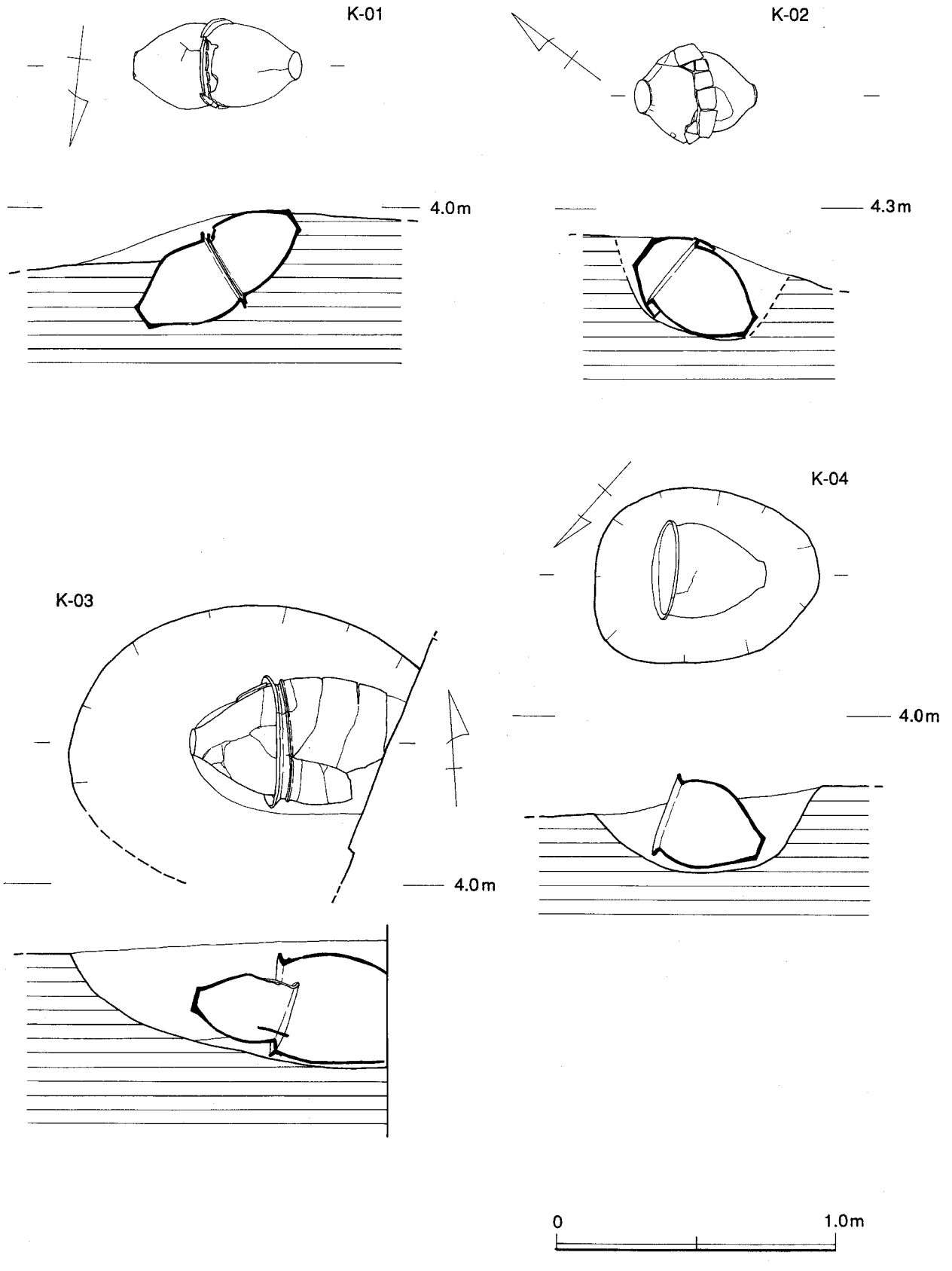


Fig.16　7次調査区1～4号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

W、埋置角度は３３°である。上甕に穿孔がみられる。墓壙の掘形は不明である。

Ｋ－０３　調査区の南東部で検出された小児甕棺墓である。上甕が下甕に収まるタイプの呑口式で、埋置方位はＮ－８６°－W、埋置角度は約６°である。下甕は隣接地の工事によって下半部は撹乱を受けている。墓壙の掘形は不明である。

Ｋ－０４　調査区の南東部で検出された小児甕棺墓である。単棺で、埋置方位はＮ－４８°－Ｅ、埋置角度は１９°である。墓壙の掘形は不明である。

Ｋ－０５　調査区の南東部で検出された小児甕棺墓である。上甕に胴部上半を打ち欠いた壺を用いている。接口式で、埋置方位はＮ－６°－W、埋置角度は約５°である。下甕の胴部外面に煤の付着がみられる。墓壙の掘形は不明で、図に示したのは便宜的なものである。

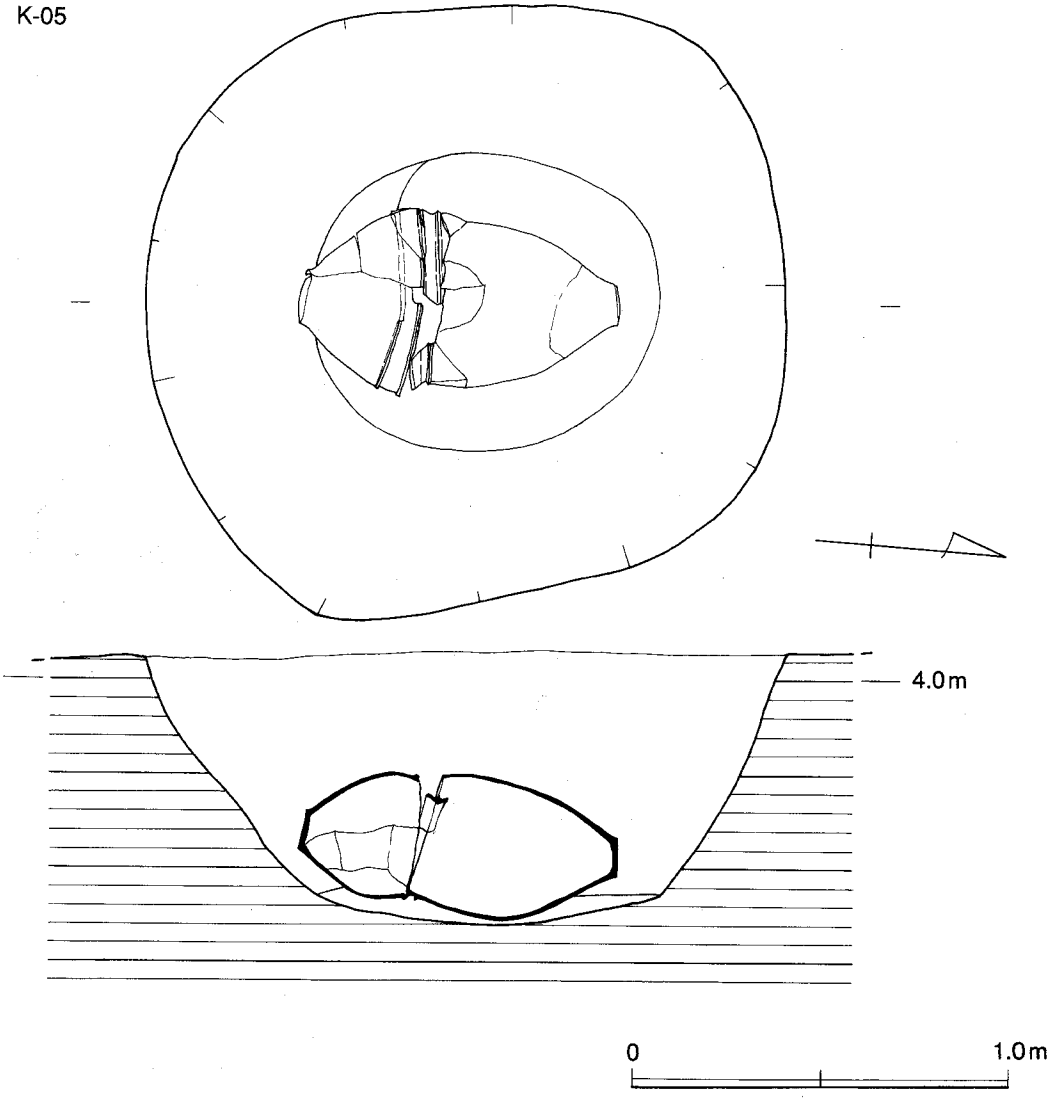


Fig.17　７次調査区５号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

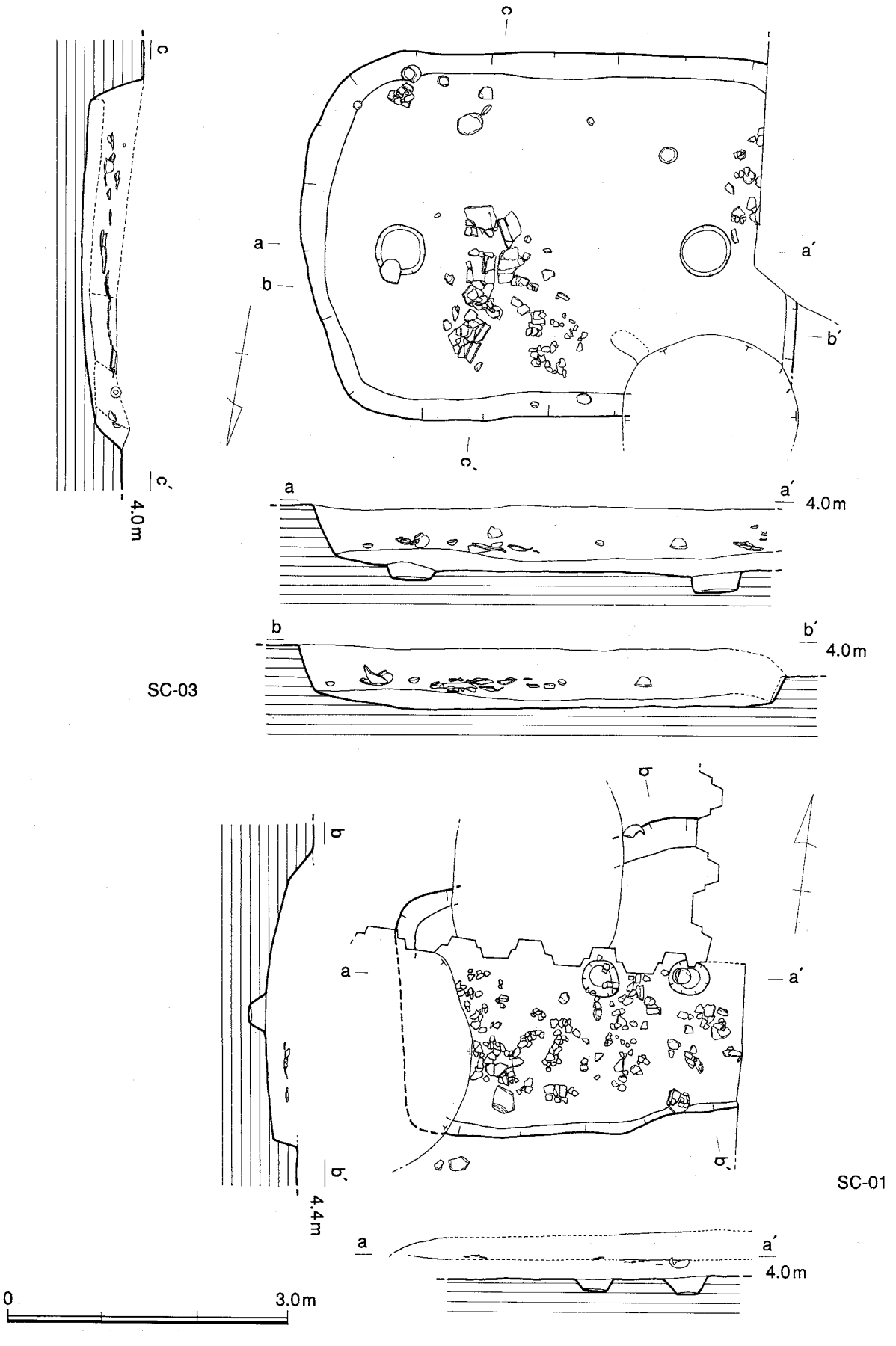


Fig.18　7次調査区SC－01，SC－03遺構実測図（縮尺1／60）

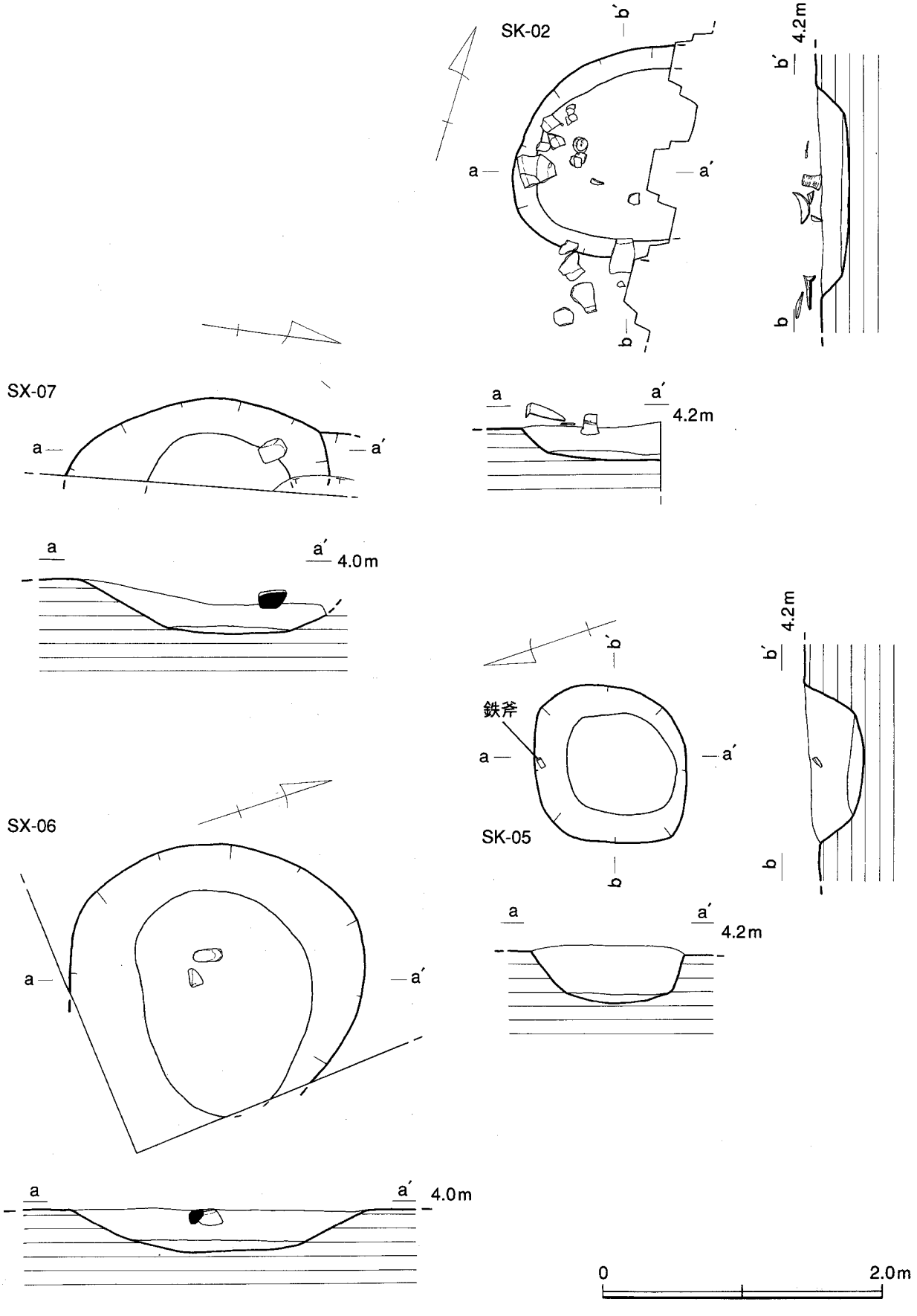


Fig.19　７次調査区SK－02，SK－05，SX－06，SX－07遺構実測図（縮尺1／40）

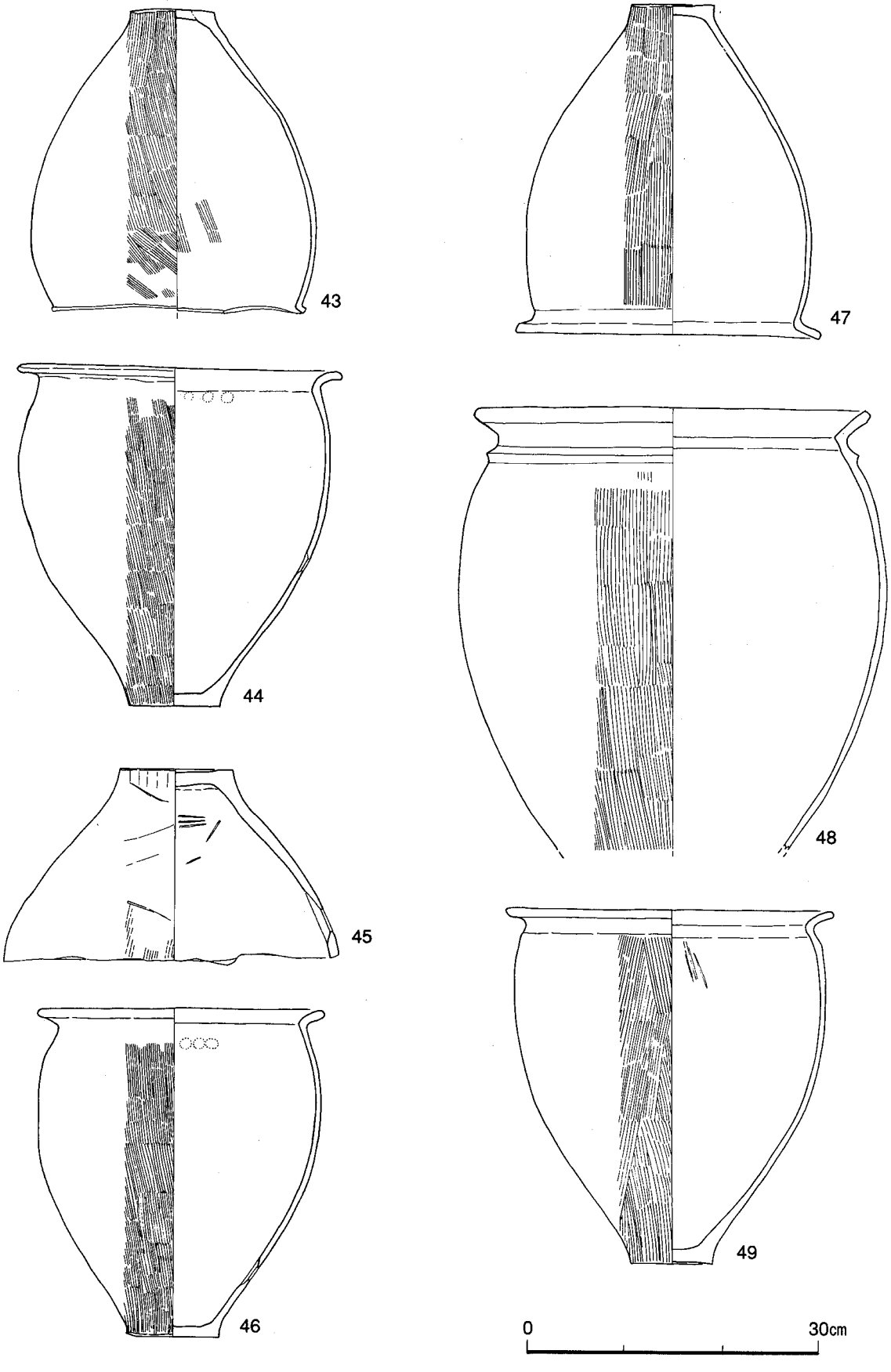


Fig.20　7次調査区1～4号甕棺実測図（縮尺1／6）

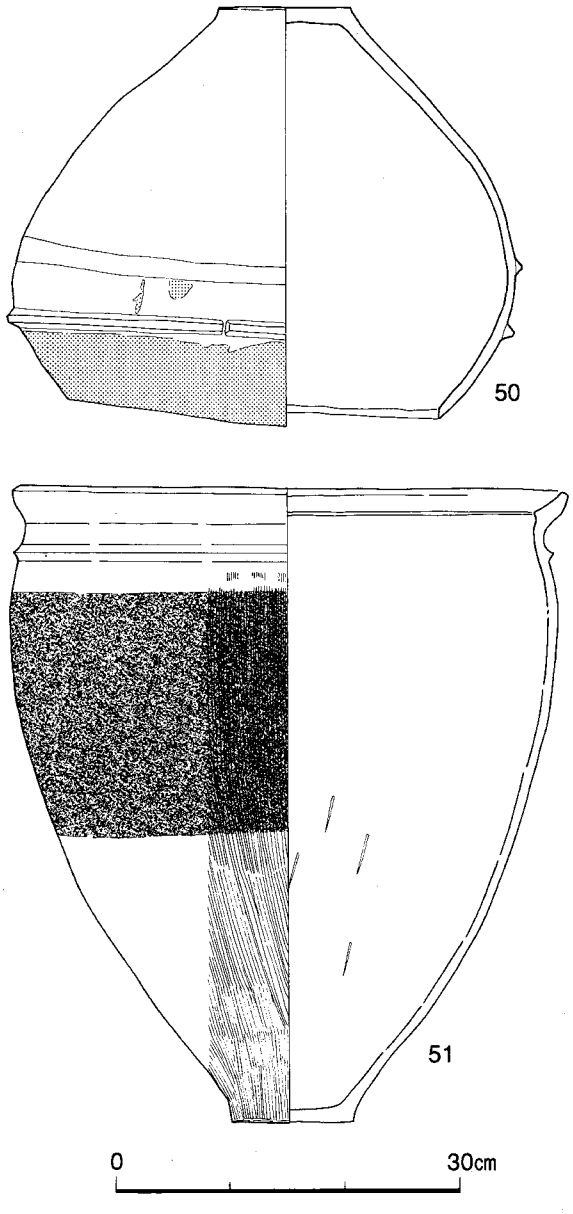


Fig.21　７次調査区５号甕棺実測図（縮尺1／6）

住居跡ほか

ＳＣ－０１　調査区中央部で検出された長方形プランの住居跡である。長軸は不明だが３.８ｍ以上、短軸は３.２ｍ程度である。床面の低い部分と壁面の上部との比高差は、約５０ｃｍをはかる。柱穴は、ほぼ長軸上に２か所確認できたが、柱間が１ｍほどしかなく、主柱穴とするのは無理であろう。黒色の覆土には、土器が多く含まれていた。土器の出土状況は、個体別に６ブロックほどに分かれていた。また覆土から碧玉製管玉１点が出土した。

ＳＫ－０２　調査区の北東部で確認された楕円形の土坑である。土器がまとまって検出されたことからその周囲を徐々に掘り下げたところ土坑の存在が明らかとなった。東側を隣接地に切られている。覆土は、やや褐色を帯びた砂である。東西に長いプランとすると、長軸は不明、短軸は１.６ｍ程度であろうか。まとまった土器片は何れも底から浮いた状態で検出された。

ＳＣ－０３　調査区の南西で確認された隅丸長方形プランの住居跡である。調査当初、この上にはユニットハウスが置かれていたが、黒色土から鉢や甕の一部が現われたため、遺構の存在を想定し、ハウスを移動した結果検出した。

遺構の遺存状況は、思いのほか良好で、

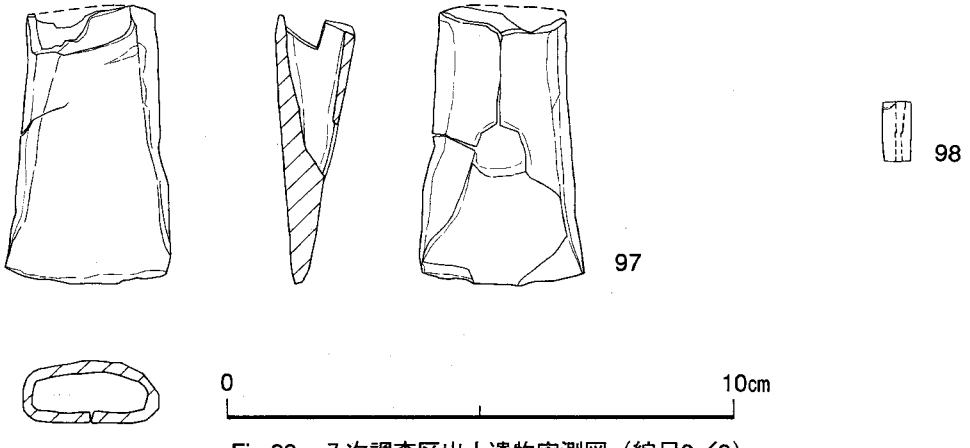


Fig.22　７次調査区出土遺物実測図（縮尺2／3）

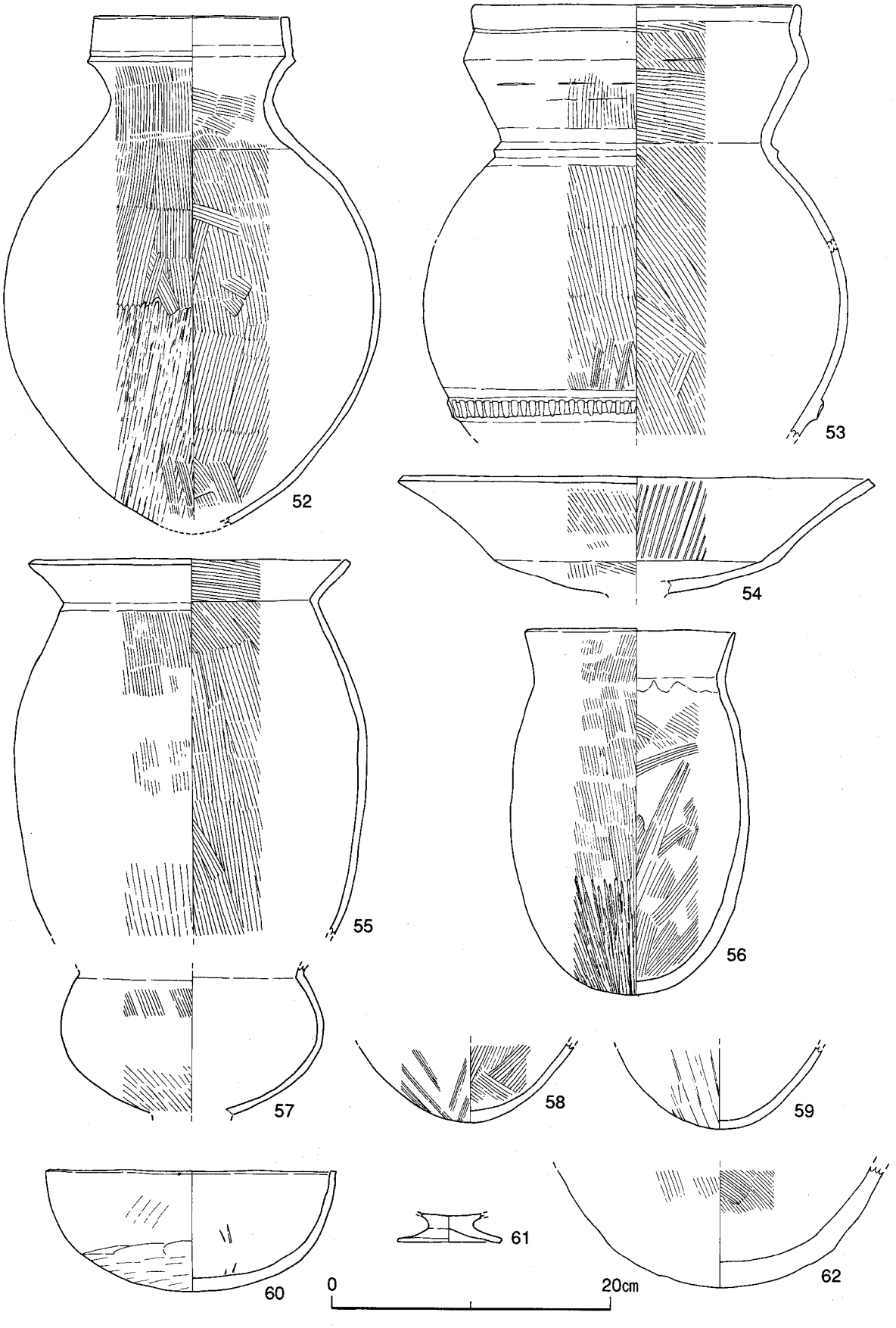


Fig.23　7次調査区SC－01出土遺物実測図（縮尺1／4）

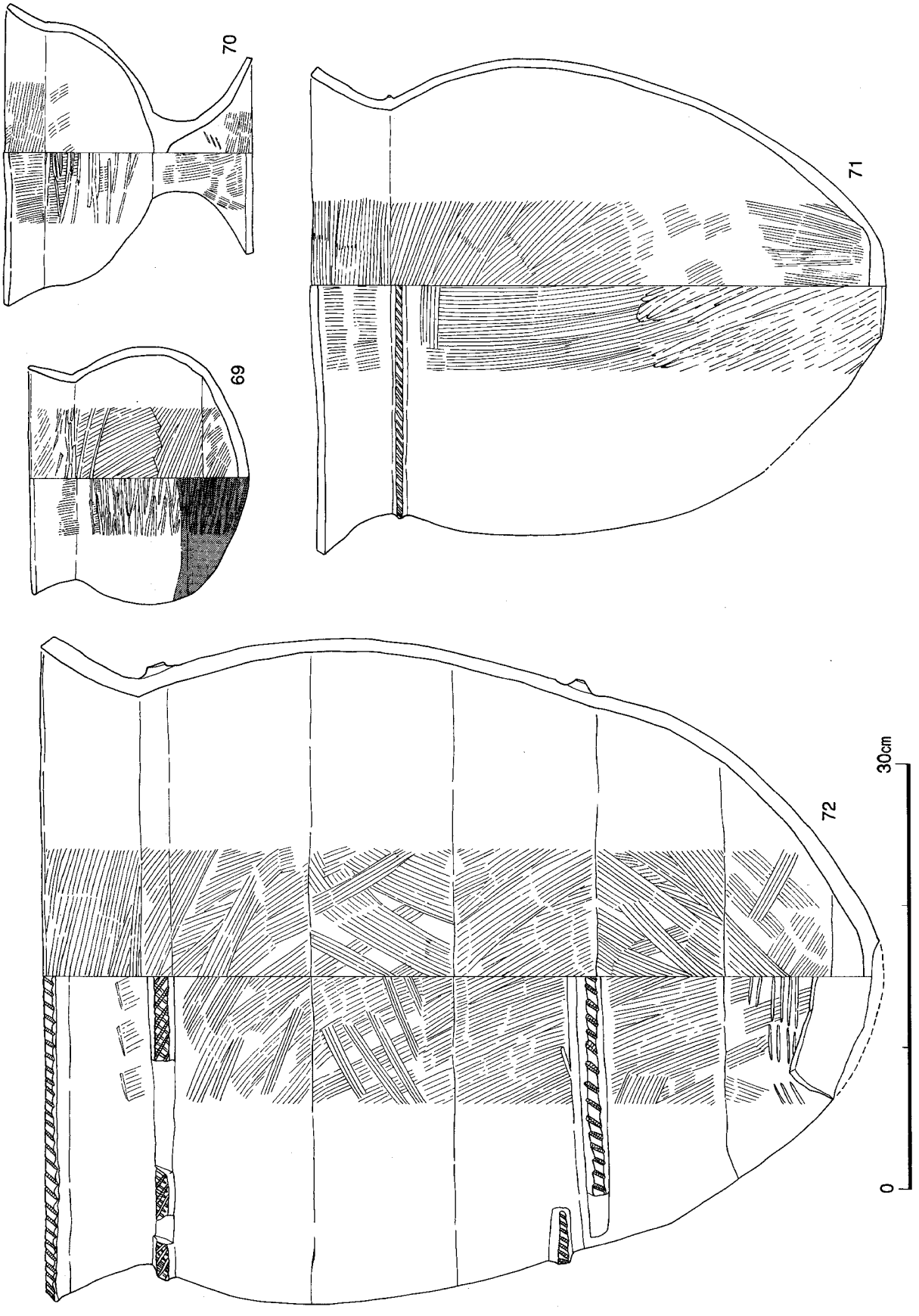


Fig.24　７次調査区SC－03出土遺物実測図１（縮尺1／4）

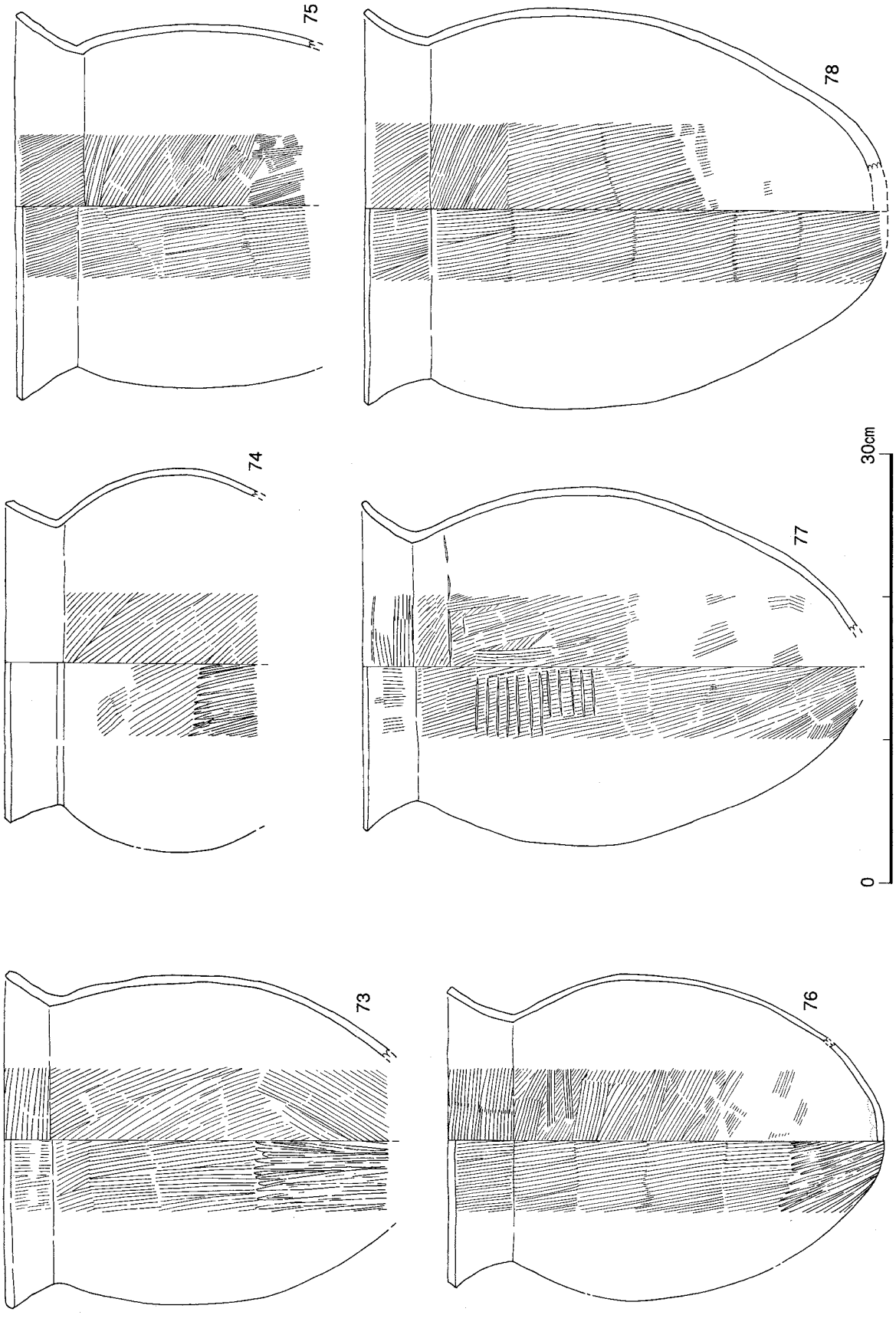


Fig.25　7次調査区SC－03出土遺物実測図2（縮尺1／4）

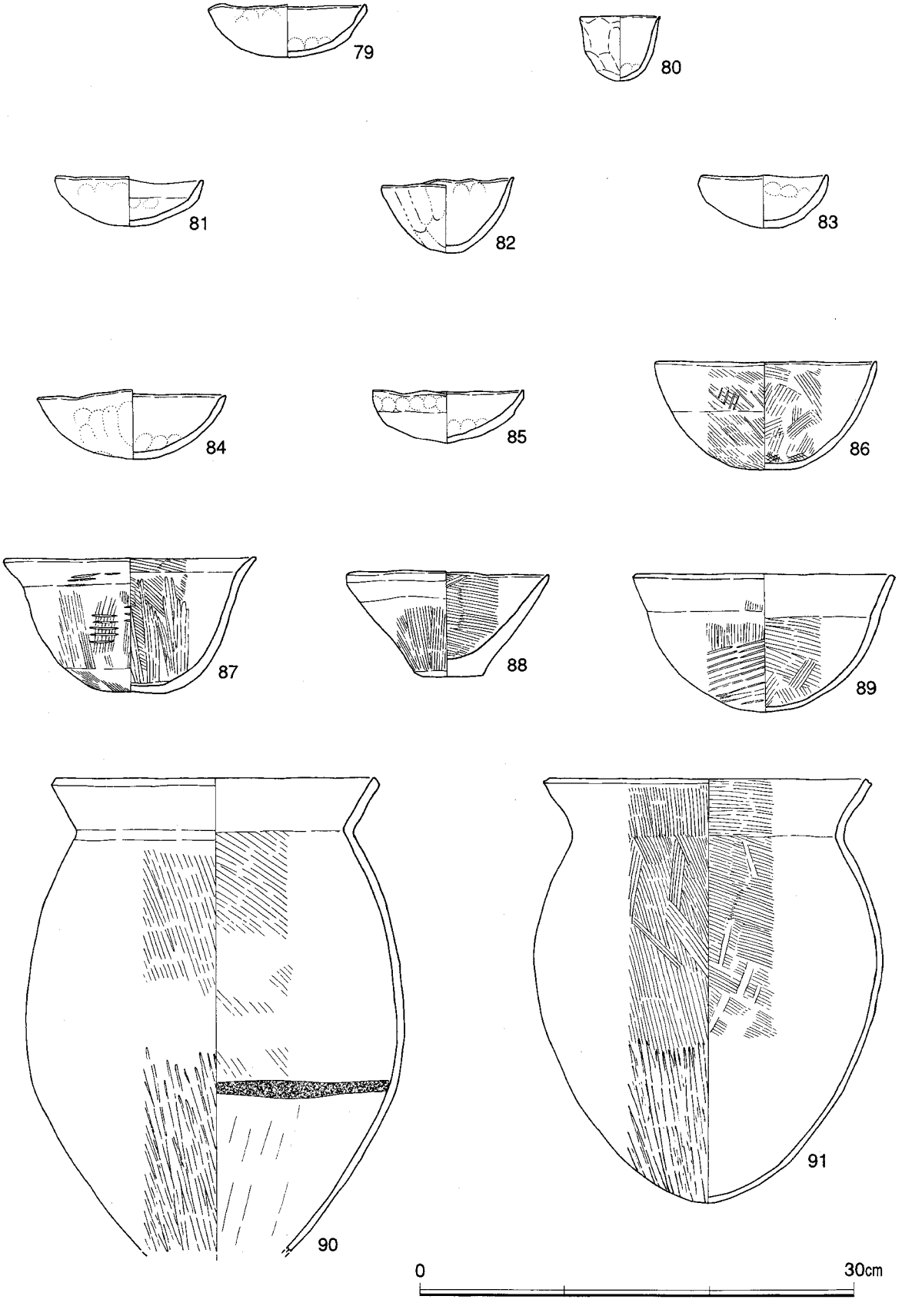


Fig.26　７次調査区SC－03出土遺物実測図３（縮尺1／4）

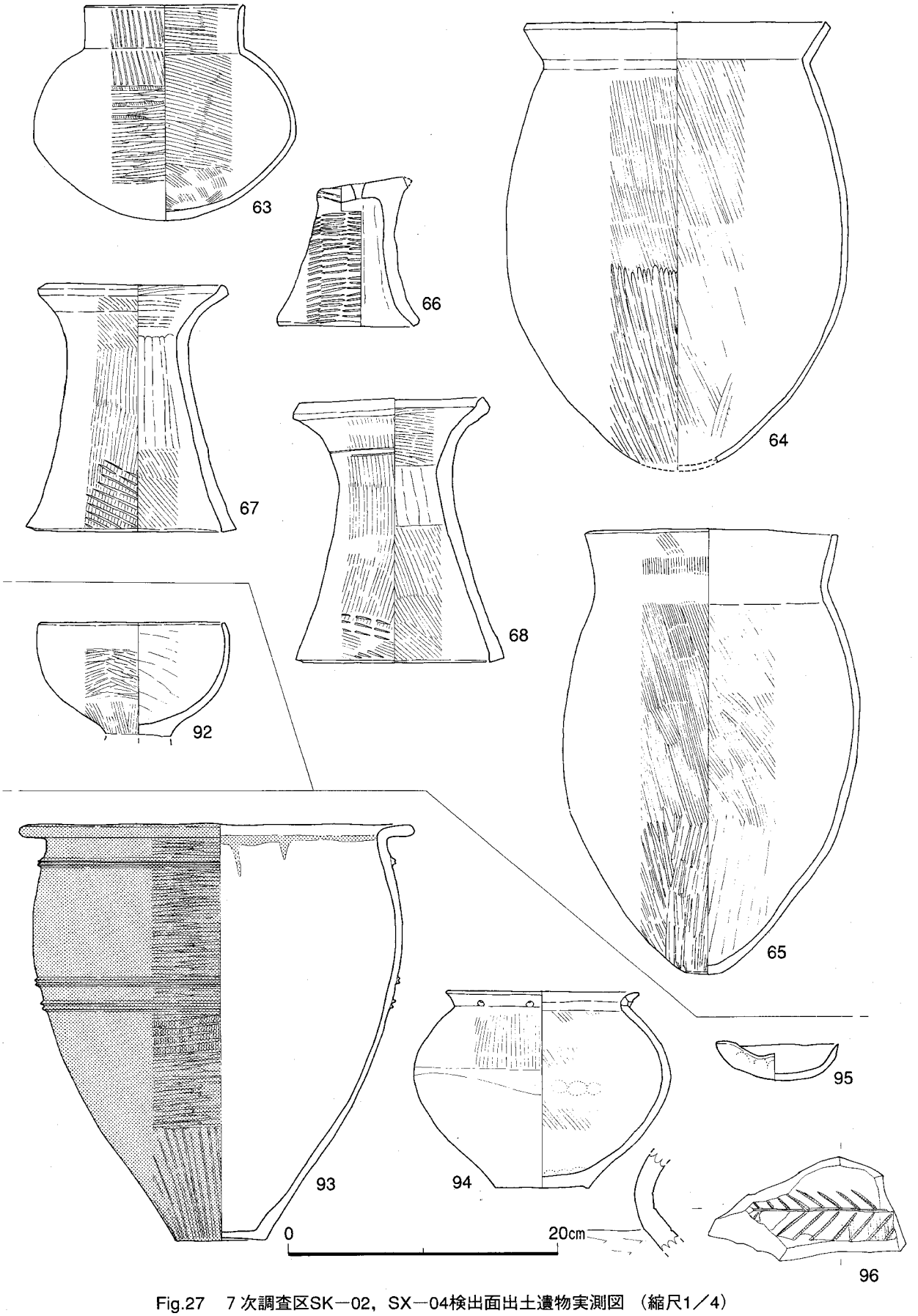


Fig.27　7次調査区SK－02，SX－04検出面出土遺物実測図（縮尺1／4）

事前の杭工事による撹乱を受けていたものの全容を確認することができた。長軸は５.６５ｍ、短軸は４.２ｍをはかる。柱穴は、長軸上に２か所確認できたが、柱間は３.４ｍほどあり、２本柱構造の主柱穴である。

壁面の掘形から柱穴が確認できた床面までの比高差が７０ｃｍほどある。また掘方に沿った壁面は堅く締まっており、砂質にもかかわらず縁を歩いても壊れないほどであった。　遺物の中、鉢の多くは、完形に近く、主柱穴の間で検出された大甕もほぼ完形に復元できた。覆土は黒灰色で、黄灰色となる面を住居の床面とするなら、遺物は、１５ｃｍ程度浮いた状態といえる。甕は外面に煤が付着していたが、焼土や炉跡に相当する構造物は確認できなかった。位置的には、後述するＳＸ－０５との関連を求めたい。

ＳＸ－０４　調査区の北側で確認された焼土と土器の細片からなる性格不明の遺構である。遺構の下面から台付鉢の破片が出土した。

ＳＫ－０５　ＳＣ－０３の東南隅に位置する隅丸方形の土坑である。長軸１.１２ｍ、短軸１.０８ｍで深さは、約４０ｃｍをはかる。覆土中に大量の炭化物を混入しており、北側の掘形に近い部分で鋳造鉄斧が検出された。調査時、この遺構は隣接するＳＣ－０３に関連するものという感触を得た。しかし周囲で鉄滓や鞴の羽口は出土しておらず、鉄器などの加工に関わるとする積極材料は認められなかった。

ＳＸ－０６　調査区の南東隅で確認された不整円形の土坑である。径は短軸で２.１ｍ程度、深さは、３０ｃｍをはかる。覆土は黒色の砂よりなる。上面に礫が浮いた状態で検出された。土器片など時期を決定できる遺物は出土していない。

ＳＸ－０７　調査区の南東部で確認された不整形の土坑である。隣接地や甕棺墓の掘形に切られているため本来の規模を推定できない。覆土は、やや褐色を帯びた砂である。上面で浮いた状態で検出された礫は、形状から一種の石皿に類する石器である。

出土遺物　土器以外の特記すべき遺物として鍛造鉄斧と碧玉製管玉がある。

鉄斧(97)は、３号住居跡（ＳＣ－０３）に隣接する土坑（ＳＫ－０５）の上面で検出された。全長６.２ｃｍ、刃部幅３.５ｃｍ、袋部幅３.０ｃｍをはかる。袋部の一部を欠失する。

碧玉製管玉(98)は、１号住居跡の覆土から出土したものである。全長１.３６ｃｍ、上端部幅０.６３ｃｍ、下端部幅０.６２ｃｍをはかる。両面穿孔である。色調は深緑を呈した、典型的な弥生時代の管玉である。住居跡の時期は西新式土器の新段階にあたるが、当該期の資料としては不自然であり、むしろ甕棺墓の被葬者の装身具が何らかの要因で混入したものと理解したい。

番号	器種	遺構	サイズ①器高	②口径	特徴 ①色調 ②胎土 ③焼成 ④内面調整 ⑤外面調整	備　考	登録番号
43	甕	K-01(上)	①	②31.0	①肌色②石英等の粗粒を多く含み褐色粒子もまばらに見える③やや軟質④ハケ目後なで⑤ハケ目		00001
44	甕	〃(下)	①底9.3	②35.0	①肌色②石英等の粗粒を多く含み褐色粒子もまばらに見える③やや軟質④ハケ目後なで⑤ハケ目		00002
45	壺?	K-02(上)	①底11.8	②	①黄灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目	外面に擦痕がある	00003
46	甕	〃(下)	①	②	①黄灰色②石英等の粗粒を多く含み雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00004
47	甕	K-03(上)	①31.4	②34.1	①明褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④なで⑤ハケ目		00006
48	甕	〃(下)	①40.4	②	①(内)黄灰色(淡褐色)②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④なで⑤ハケ目		00008
49	甕	K-04(単)	①28.2～34.3 (歪んでいる)	②36.7	①淡褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④なで⑤ハケ目	内面に調整具の痕と小動物の牙痕がある	00005
50	壺	K-05(上)	①底11.4	②	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④横なで⑤なで	下段の突帯は半周しない・小動物の牙痕が回る	00009
51	甕	〃(下)	①34.5～47.7	②55.2	①明黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目	煤を付す	00007

Tab.2　７次調査区出土遺物観察表１

番号	器種	遺構	サイズ①器高	②口径	特徴 ①色調 ②胎土 ③焼成 ④内面調整 ⑤外面調整	備考	登録番号
52	壺	SC−01	①14.0	②36.5	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目～なで		00101
53	壺	〃	①	②	①暗黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00111
54	高杯	〃	①34.5	②	①褐色～黄灰色②砂細粒を含む③良好④なで⑤ハケ目		00109
55	長胴甕	〃	①	②	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③やや脆い④ハケ目⑤ハケ目		00105
56	長胴甕	〃	①16.0	②26.4	①淡茶灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③二次焼成によって器壁は脆弱④ハケ目⑤ハケ目		00103
57	台付鉢	〃	①	②	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③やや脆い④なで?(磨滅が著しい)⑤ハケ目(二次焼成による?剥落が進む)～なで		00104
58	甕(底部)	〃	①	②	①(内)黄灰色(外)褐色②石英等粗細粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後なで		00106
59	甕(底部)	〃	①	②	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④なで⑤なで	外面に煤を付す	00107
60	鉢	〃	①21.0	②8.8	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで⑤ケズリ後なで・底部ケズリ		00102
61	台付鉢?(脚部)	〃	①	②	①肌色②石英や雲母の細粒を含む③良好④なで⑤なで		00108
62	大甕(底部)	〃	①	②	①(内)黄灰色(外)褐色②石英等の粗粒を含む③やや軟質④ハケ目⑤ハケ目	内面に赤色顔料を付す	00110
63	壺	SK−02	①12.0	②16.0	①茶灰色②雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後ミガキ		00202
64	長胴甕	〃	①	②	①茶灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目⑤ハケ目～ハケ目後なで	煤を付す	00204
65	長胴甕	〃	①19～21.0	②33.2	① ②石英の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後なで		00201
66	支脚	〃	①11.2	②11.1	①茶灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④なで⑤タタキ		00203
67	器台	〃	①14.0	②18.4	①暗茶灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④なで⑤ハケ目		00205
68	器台	〃	①14.6	②19.7	①暗茶灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤タタキ後ハケ目		00206
69	短頸壺	SC−03	①16.2	②15.3	①淡褐色②雲母の細粒を多く含む(精良)③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目後ヘラなで	底部に煤を付す。煮沸に使用。	00303
70	台付鉢	〃	①21.5	②17.5	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目後なで		00302
71	長胴甕	〃	①34.4	②40.5	①茶灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目		00310
72	大甕	〃	①46.6	②58.8	①黄灰色～褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目	突帯は重ならずずれる	00312
73	長胴甕	〃	①23.6	②	①茶灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00313
74	長胴甕	〃	①	②	①黄灰色②石英等の砂粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後なで		00322
75	長胴甕	〃	①	②	①淡黄褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00323
76	長胴甕	〃	①21.0	②30.4	①暗黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00319
77	長胴甕	〃	①23.0	②34.5	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00311
78	長胴甕	〃	①	②	①黄灰色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目	内面及び外底部に紅色を帯びる	00321
79	鉢	〃	①11.0	② 3.8	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00316
80	鉢	〃	① 5.6	② 4.6	①暗黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00315
81	鉢	〃	①10.2	② 3.4	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00306
82	鉢	〃	① 9.0	② 5.3	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00301
83	鉢	〃	①9.0～9.5	② 3.7	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④横なで⑤横なで	手づくね	00305
84	鉢	〃	① 4.9	②13.0	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00314
85	鉢	〃	①10.3	② 3.7	①暗黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00307
86	鉢	〃	① 7.5	②15.0	①暗褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④⑤ハケ目(粗い原体によるタタキ?)		00318
87	鉢	〃	①17～17.5	② 9.4	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後ヘラミガキ⑤タタキ後なで		00309
88	鉢	〃	①13～14.0	② 7.3	①暗黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目		00308
89	鉢	〃	①18.0	② 9.6	①黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後なで		00317
90	長胴甕	〃	①	②	①暗褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目後なで	底部外面に煤を付し、内面に炭化物が帯状に付着	00304
91	長胴甕	〃	①22.8	②29.4	①暗黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで⑤ハケ目	外面に煤を付す.内面底部に炭化物が付す	00320
92	台付鉢	SX−04	①13.8	②	①暗褐色②石英の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目後なで⑤なで		00504
93	甕	検出面	①29.0	②30.9	①黄灰色②方柱状の黒色鉱物を含む③良好④なで⑤ハケ目後研磨		00502
94	壺	検出面	①14.2	②14.6	①黄灰色～淡褐色②石英等の粗粒を含む③良好④ハケ目後なで⑤なで	一対の孔が対峙・	00501
95	鉢	検出面	①	②	①淡黄褐色②石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ ⑤	手づくね	00503
96	大甕	検出面	①	②	①淡黄灰色②石英等の粗粒・雲母の細粒の他・褐色の粗粒を含む③良好④胴部削り⑤ハケ目後有軸羽状紋を回らす	山陰系土器	00505

Tab.3　7次調査区出土遺物観察表2

第4章　ま　と　め

今回の２地点の調査区は、西新町遺跡の南西部に位置している。調査区の南にはしる東西方向の道路は国道２０２号線が開通するまで唐津街道として機能していた。

西新町遺跡のこれまでの調査によって、Fig. 1 に示すように東西と南北に主要道路に沿った状況が明らかとなった。遺構は、弥生中期の甕棺墓と後期終末から古墳時代にかけての集落とに大別できる。

甕棺の時期は、何れも弥生中期後葉に比定される型式に属している。１～４号甕棺に使用された小型の甕形土器はすべて「く」字状口縁に移行する前段階の形態である。３号甕棺下甕はすでに「く」字状口縁である。中型以上の甕については、早良区の有田遺跡３次調査の井戸跡出土の甕や城南区丸尾台遺跡の前漢鏡や素環頭大刀を副葬した甕などを類例としてあげることができる。５号甕棺下甕のように内彎気味に屈曲する「く」字状口縁も、西新町遺跡２次１９号甕棺の上甕にみられるように立岩式新段階の成人棺とセットとなる例が指摘できる。このように５次調査の甕棺墓に使用された容器は、口縁部が打ち欠かれた壺は時期決定に曖昧さをのこすものの、日常土器としては須玖式の最終段階、甕棺の型式としては先述した立岩式新段階の器種に併行する時期に位置づけることができる。また実年代としては一世紀中葉に近い時期と推定される。

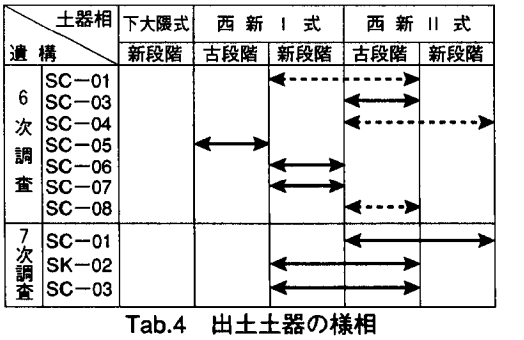
次に集落について述べよう。弥生終末から古墳時代にかけての在来系土器は西新式と呼称されている。これまで筆者は出土例の多い在来系甕形土器の型式をもとに編年をおこなってきた。[1] その概要は凸レンズ状の不安定な底部の下大隈（しもおおくま）式新段階、尖底状の丸底のうち小さなコインほどの底部がつく西新Ⅰ式古段階、尖底状の丸底が主体をなす西新Ⅰ式新段階、胴部中位に重心がくる丸底の西新Ⅱ式古段階から胴部下位に重心がくる丸底の西新Ⅱ式新段階への変遷である。

遺構の時期を検出された土器によってあてはめると、土器相の範囲は、Tab. 4 に示すようになる。出土遺物が少ないなどの理由で土器相の確定が難しい資料については破線で表現した。出土遺物のまとまった７次調査のＳＣ－０１は、５６のように下膨れ気味の胴部をもつ甕や屈曲部が脚柱部寄りに移行した高杯５４のように西新Ⅱ式新段階の特徴が強く窺える。５２の壺は在来の複合口縁壺の系譜では理解できない要素も含んでいるようである。５８・５９のような胴部中位に重心がくると推定される器種がみられることから西新Ⅱ式全般に幅をもたせた位置づけを行なった。ＳＣ－０３については７１のように重心が胴部上半で底部がのこるタイプから胴部中位に重心がくるタイプまでを含んでいることから幅をもたせざるを得なかった。

住居跡の構造について６次調査では各隅に４本の柱痕が検出されたＳＣ－０６は、床面積約１５㎡をはかり、他の２本柱穴が確認された住居跡の７～８㎡と比べると規模が大きい。７次調査ではＳＣ－０１が長軸を４ｍとすると約１２㎡、ＳＣ－０３は長軸に沿った２本柱の構造ながら２２㎡の床面積を有しており、規模的にも中枢あるいは特殊な用途が想定される遺構である。

西新Ⅰ式新段階から西新Ⅱ式新段階にかけて山陰・畿内・朝鮮半島南部など外来系土器の流入がみられるようになる。このなかで外来系土器の構成比率が高い集落は、遺跡の北東部に集中する傾向があるといわれてきた。[2] 今回の調査ならびに７次調査に西接する１０次調査の所見もこうした指摘を裏付ける結果となった。[3] しかし土器の出土状況は遺棄されたといえる例が少ないため、該期の集団構成をどこまで反映するかは意見の分かれるところであろう。

※註
(1) 常松幹雄「庄内式土器の時代（玄界灘沿岸）」『考古学ジャーナル』No.363、1993
(2) 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120輯、1983
(3) 調査者の屋山洋氏のご教示による。



Tab.4　出土土器の様相

SUMMARY

Nishijin-machi ruins are located in the north side of Sawara plain that faces Hakata bay. One of their charactaristics is they are on the dune. According to the geological survey, the dune around there is said to have been formed at the end of Jomon period.

After the construction of the subway, many buildings were constructed along the main street. Looks of the town have made great changes.

During 1993 and 1994 campaign, we excavated 3 points of the ruins. On this report, we make a report on 6th and 7th survey. They are situated in the southwest of the ruins. And the distance between them is only 50 meters.

The main structual remains found there were jar burials and pit dwellings. At the 7th point, we found five jar burials. They consist of a part of the cemetry, and each burials are used for children. According to the shapes of the jar, they can be dated to the end of Middle Yayoi period.

Concerning about the dwellings, they belong to the end of Late Yayoi period. "Nishijinnmachi type pottery" was named after these ruins.

At the 6th point, we found nine pit dwellings. Most of the plan for the dwellings are squares with two post holes. The floor space is seven or eight square meters. Especially dwelling No.6 has four post holes at each corners, and the floor space is 15 square meters.

At the 7th point, we found two pit dwellings. The plan for dwelling No.3 is elliptic and the floor space is about 22 square meters. There are two post holes on the long axis.

Although most of the potteries excavated there are composed of native ones,those from foreign districts are few in number. As such a tendency has been already pointed out, we recognized it again.

Except for potteries,an iron axe and stone net sinkers were found. The former is the result of intercource with developed tequnicus, the latters show us the activity for fishery.

At the end of this report, we greatly appreciate advices and aids by many people.

KEYWORDS:Ruins on the dune
Cemetry at the end of Middle Yayoi period ca.20～60A.D.
Pit dwellings at the end of Late Yayoi period ca.the3rd.c.A.D.
Nishijin-machi type pottery

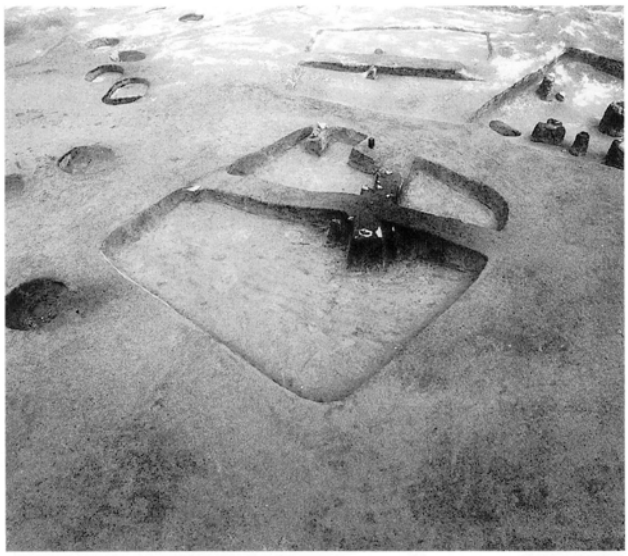
図　　版

◀(1) 6 次調査区全景（南より）
▼(2) 6 次調査区全景（北西より）

溝状遺構（東より）(3)▶

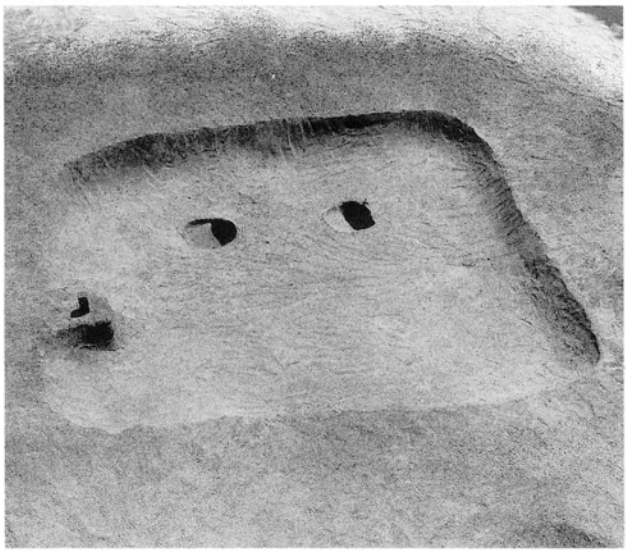
PL. 2

(1) SC－01（東より）



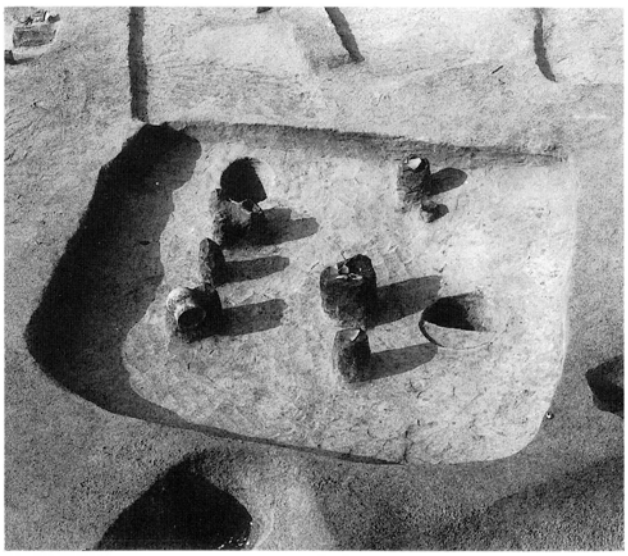
(2) SC－02　遺物出土状況（西より）

(4) SC－03　遺物出土状況（西より）



(3) SC－02　完掘状況（北より）

(5) SC－03　完掘状況（南より）



(6) SC－04　遺物出土状況（南より）

▲(1) SC－05（南東より）

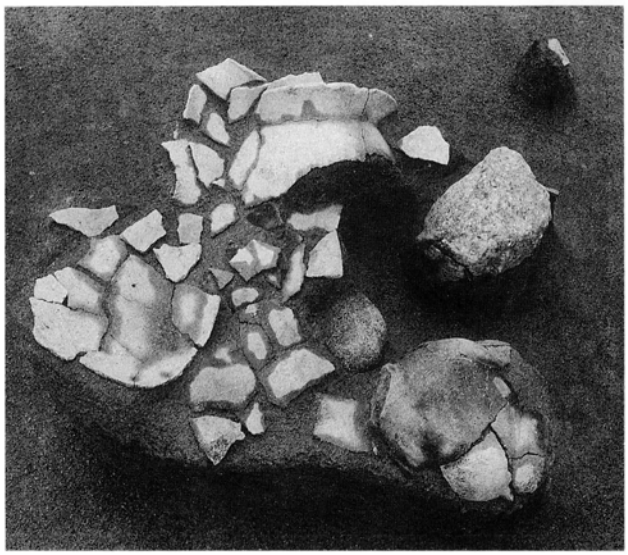
▼(2) SC－06　出土石錘（東より）

▲(3) SC－06（北より）

PL. 4

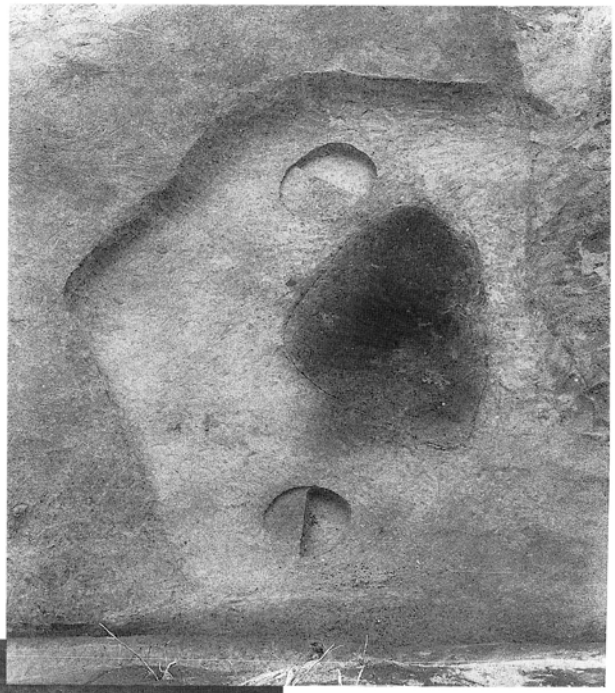
◀(1) SC－06　遺物出土状況（北東より）

SC－06　完掘状況（南より）　(2)▶

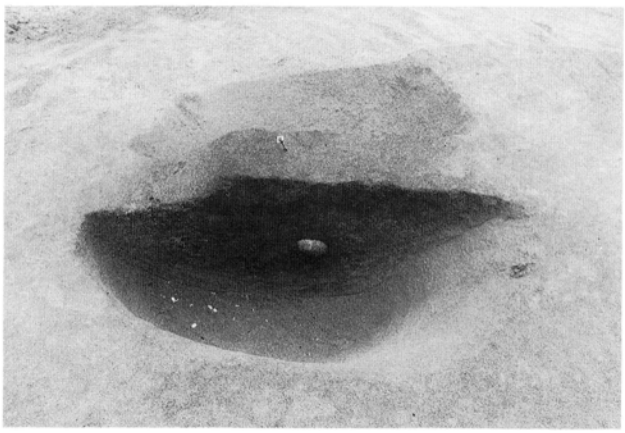


(3) 遺物出土状況（西より）

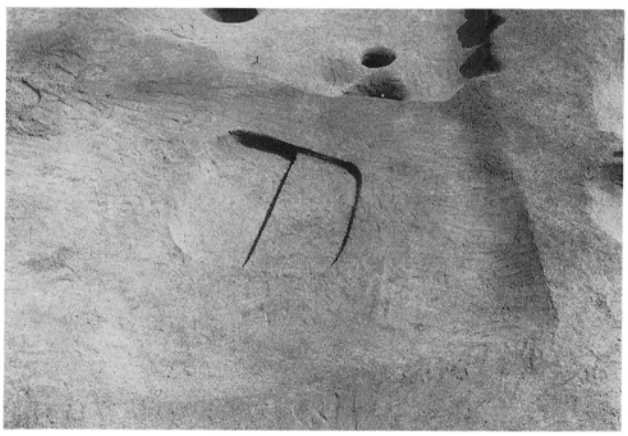
(4) 焼石出土状況（北より）



SC－07　完掘風景（西より）(1)▶
SC－07　遺物検出風景（東より）(2)▼



(3) SX－09　（北より）



(4) SC－10　（北より）

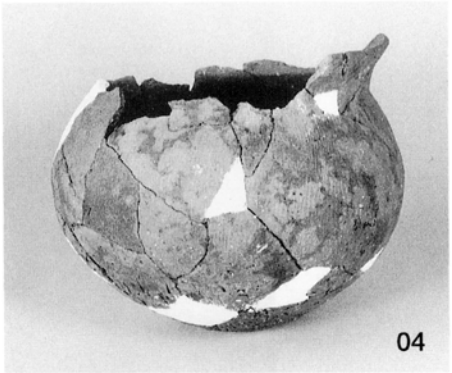
PL. 6

SC－01

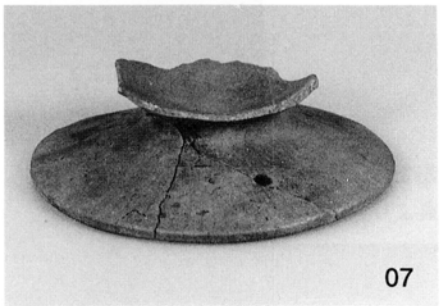
SC－03

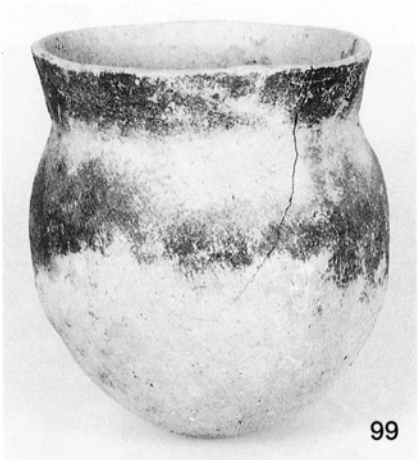
SC－04

SC－05

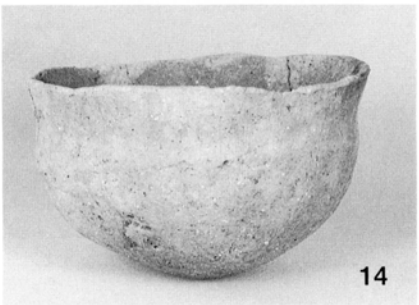

04

05


07


99

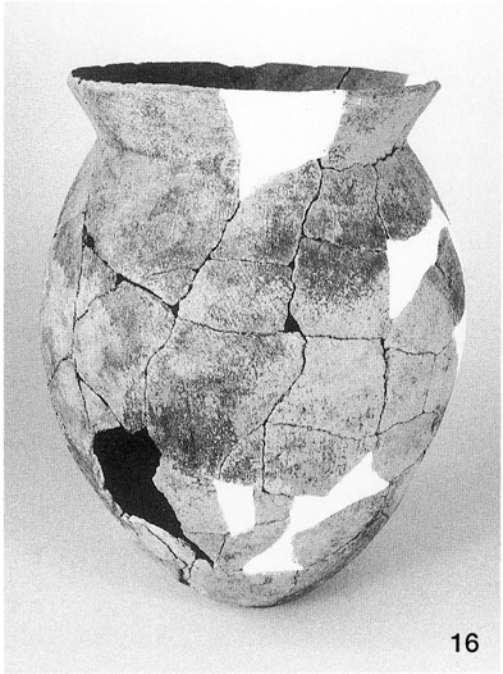
11


14

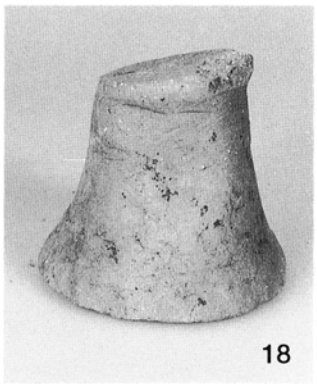
12

15

住居跡出土遺物 1

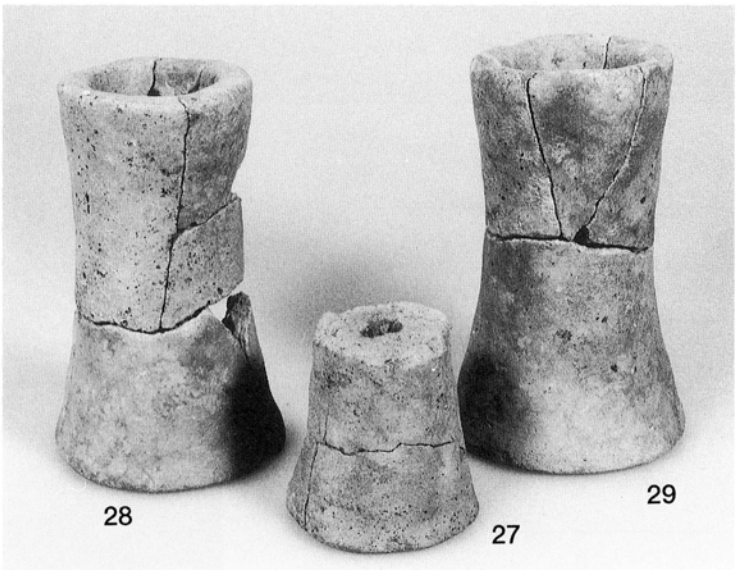

16

17


18

26

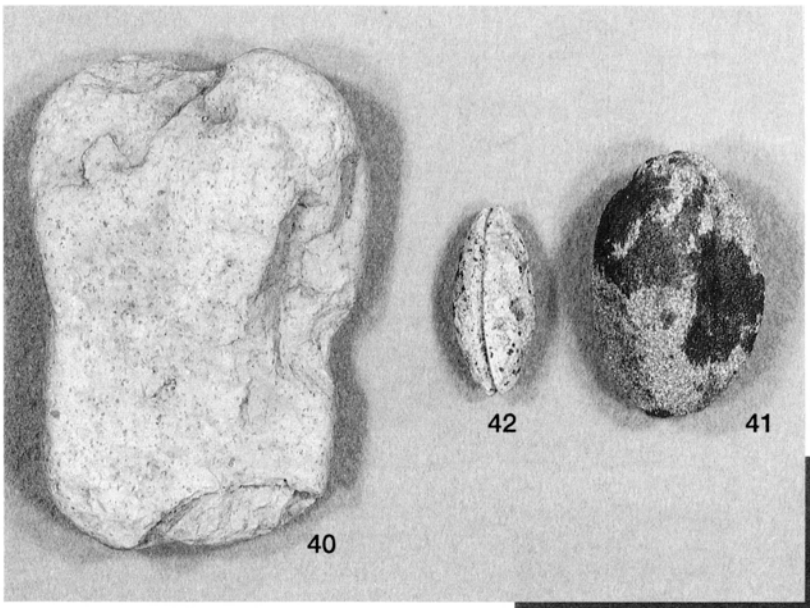
25

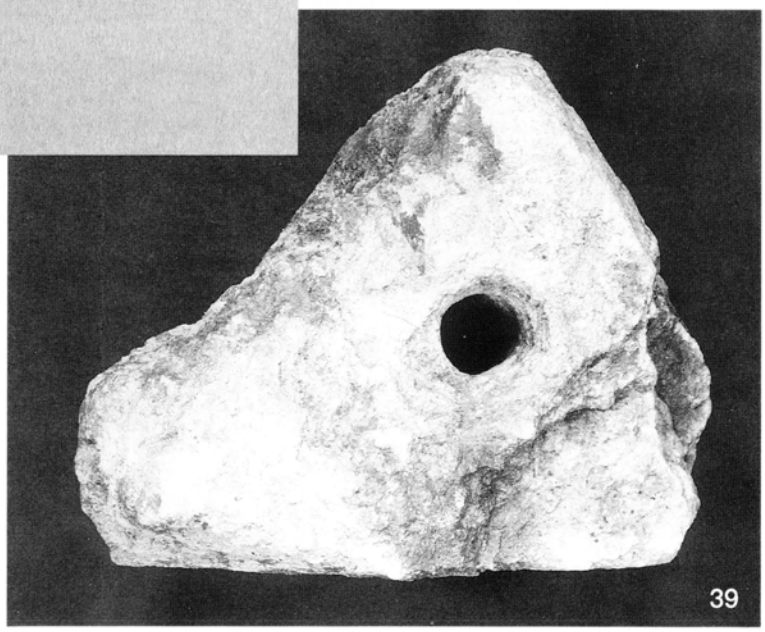

28
27
29

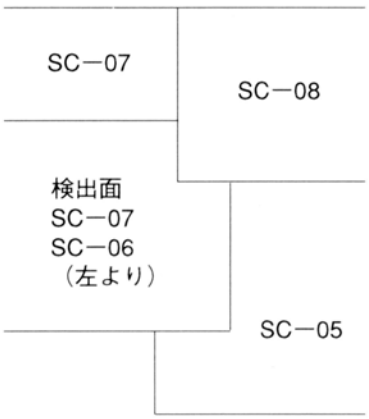
SC－06

SC－07

住居跡出土遺物 2







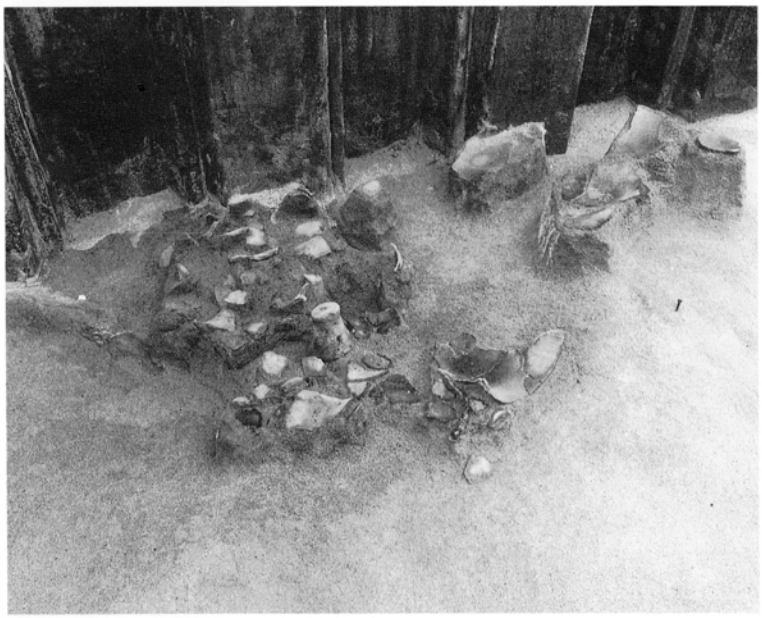
住居跡出土遺物 3

(1) 西新町遺跡 7 次調査区全景（東より）

(2) 西新町遺跡 7 次調査区南拡張区全景（東より）

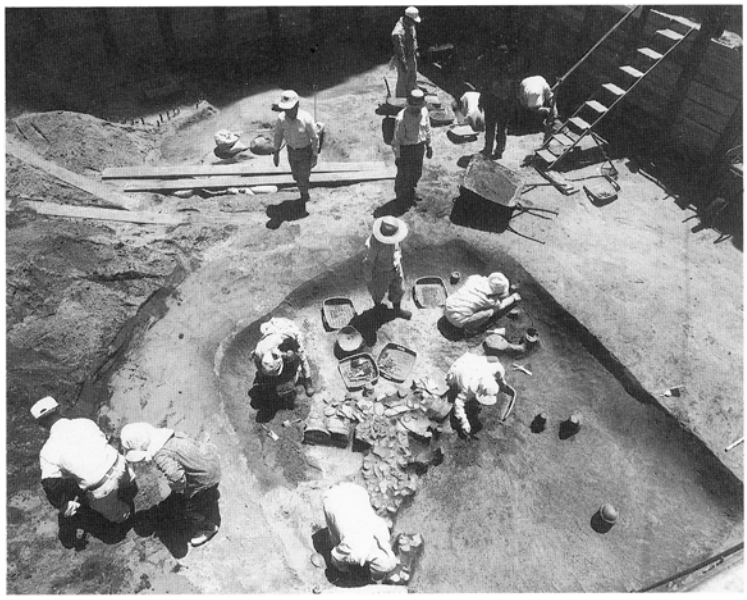
PL. 10

◀(1) SX−04　全景（東より）

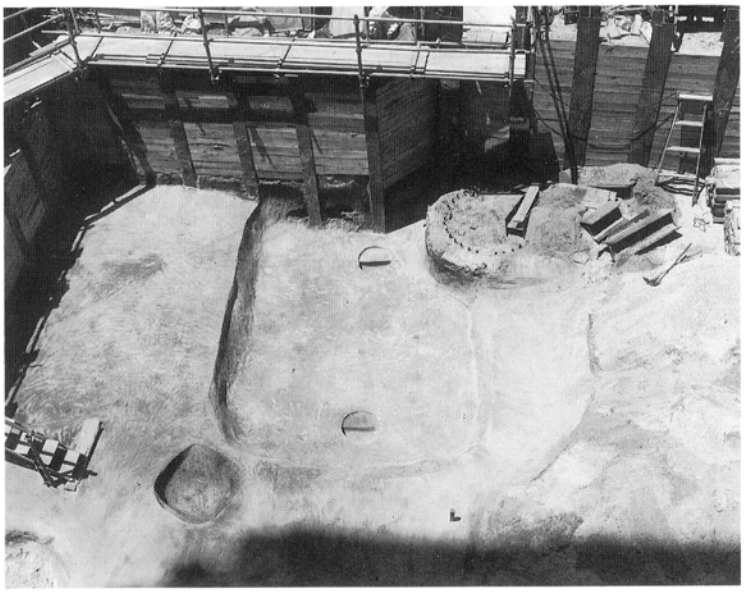


SK−02　全景（西より）(2)▶

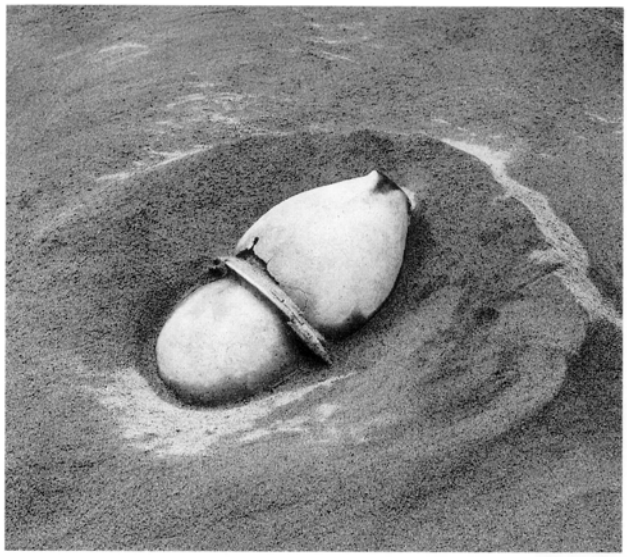
◀(3) SC−01　全景（南より）



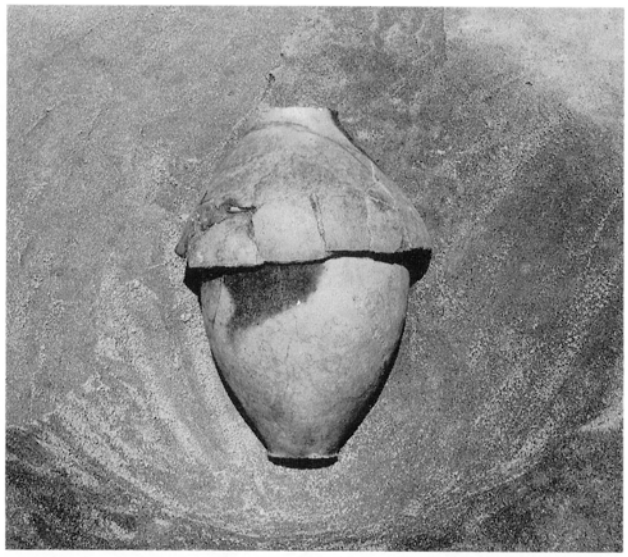
◀(1) SC－03　発掘作業風景（西より）
▼(2) SC－03　遺物出土状況（東より）



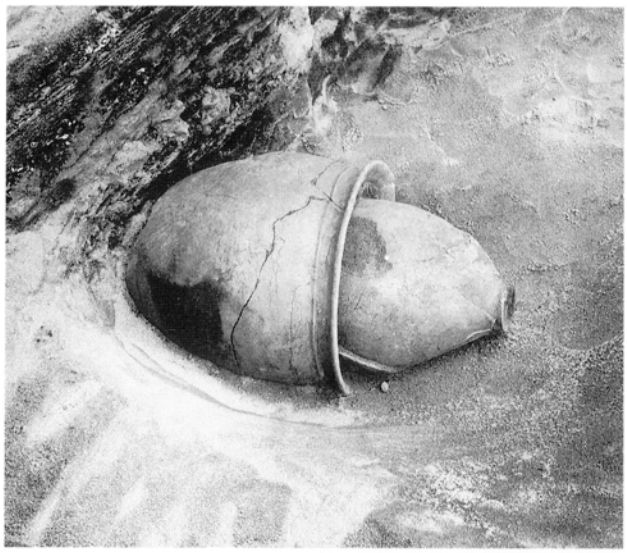
SC－03　完掘風景（東より）▶



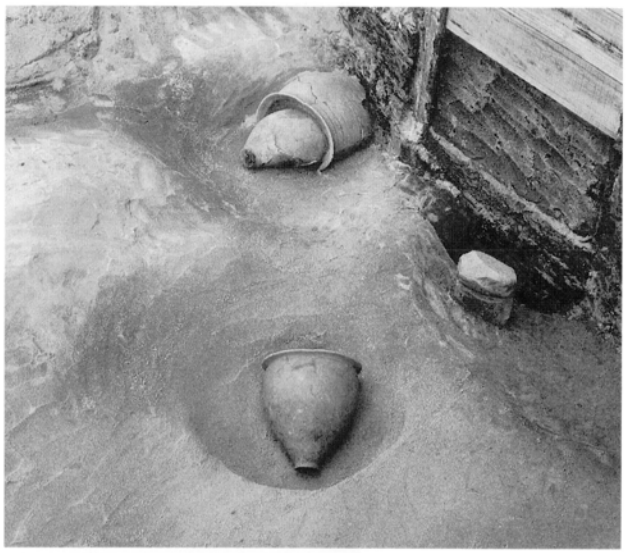
▲(1) 1号甕棺墓出土状況（東より）



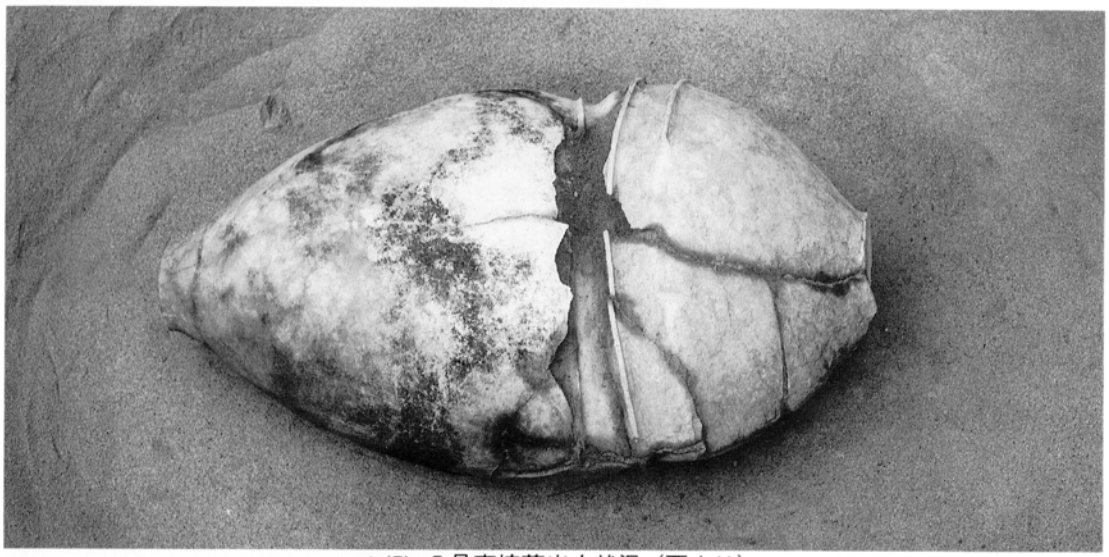
▲(2) 2号甕棺墓出土状況（南より）



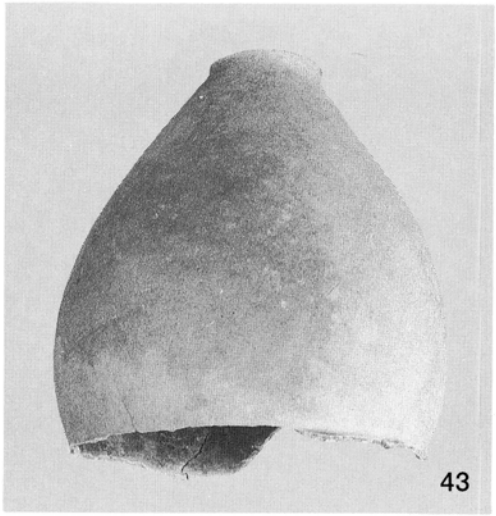
▲(3) 3号甕棺墓出土状況（北より）

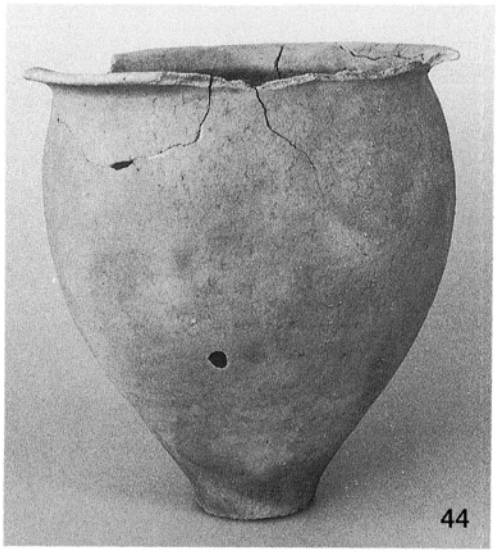


▲(4) 4号甕棺墓（手前）出土状況（西より）

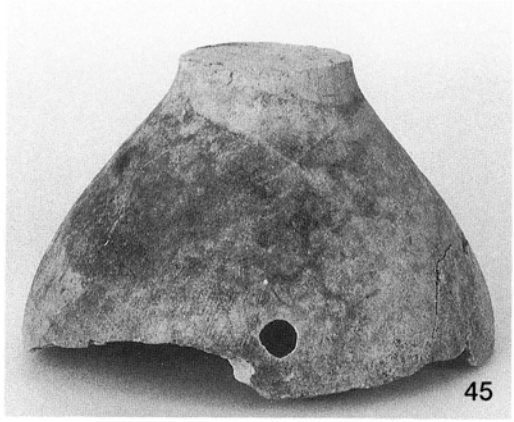


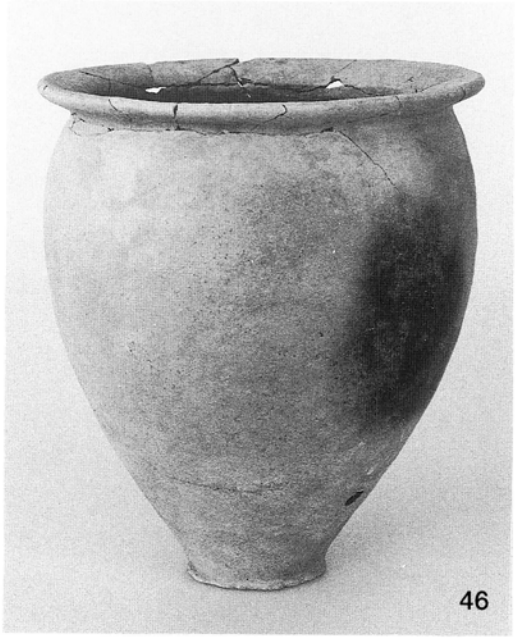
▲(5) 5号甕棺墓出土状況（西より）



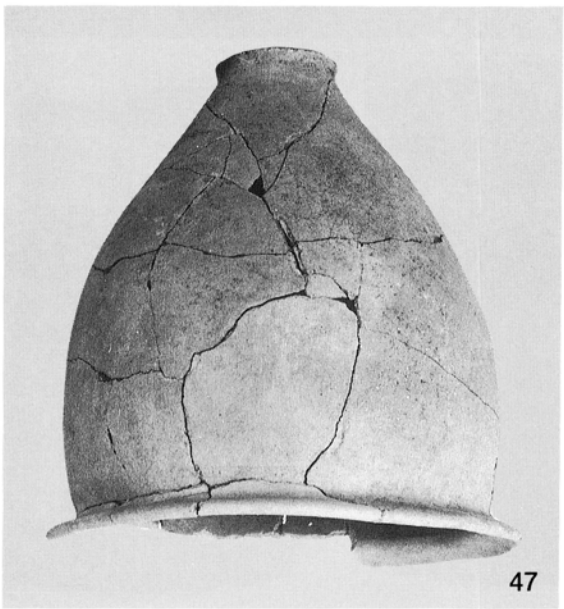


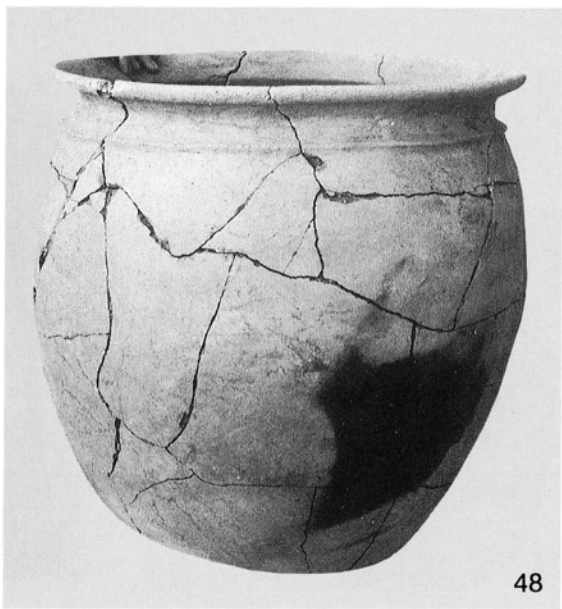
▲1号甕棺〈上・下〉



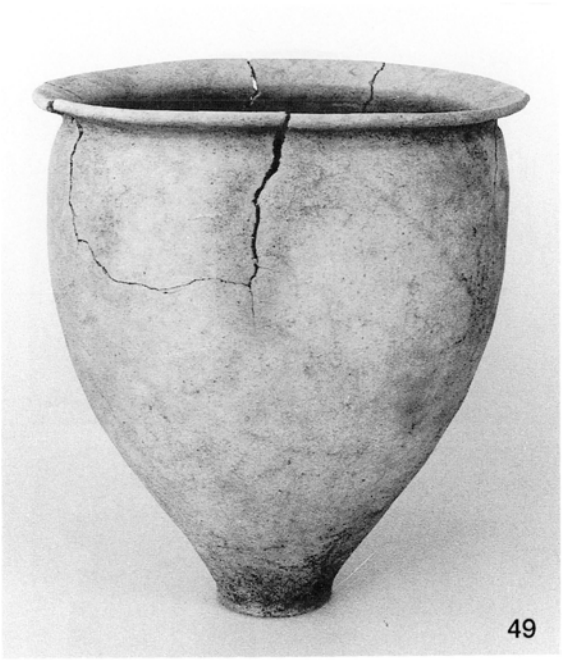


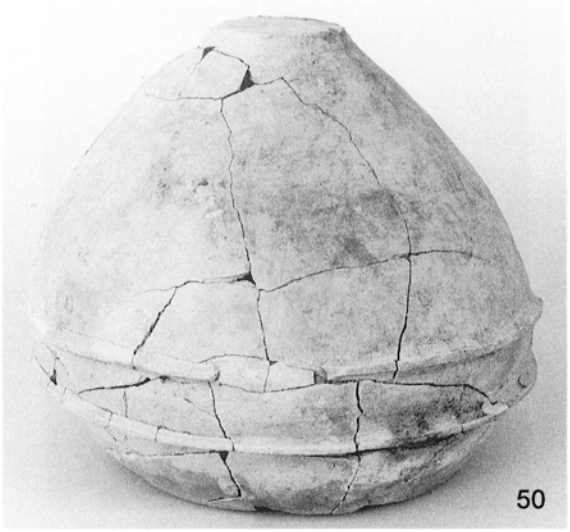
▲2号甕棺〈上・下〉



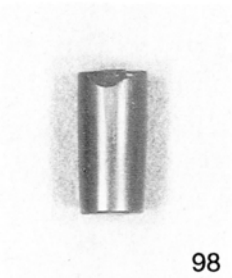


▲3号甕棺〈上(左)・下(右)〉

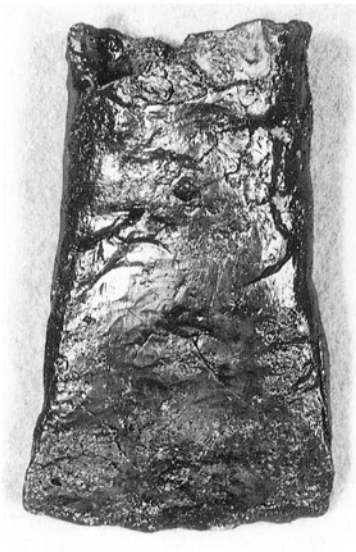


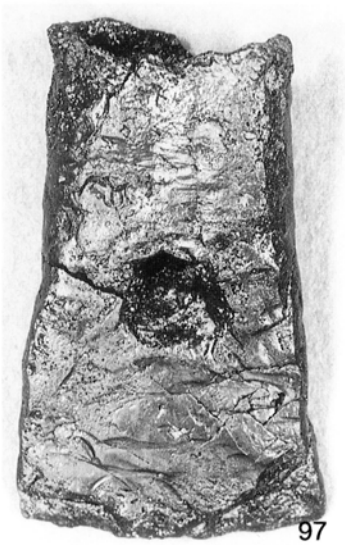


▲4号甕棺
5号甕棺〈上・下〉▶



▲SC－01出土の管玉

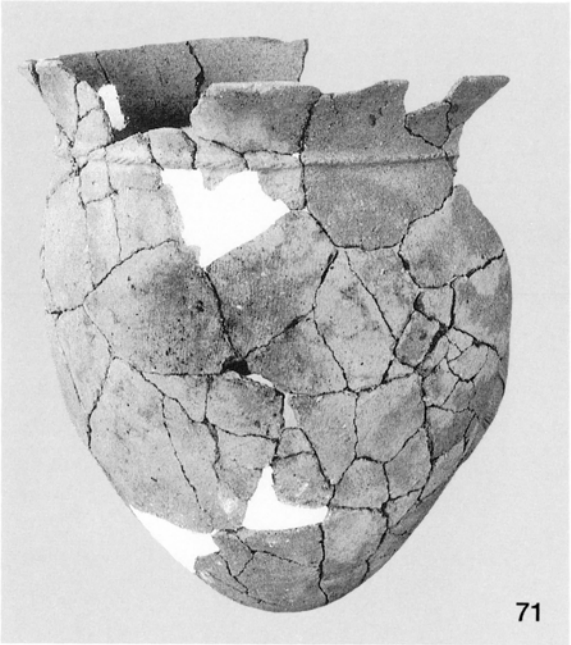




▲SK－05　出土鉄斧　処理前・正面・合わせ目（左より）

▲SC－01　出土遺物

▲SK－02　出土遺物



▲SC－03　出土遺物

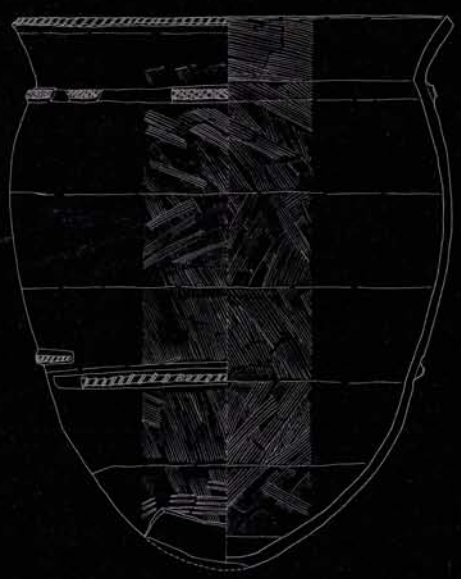
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第483集
西新町遺跡 4　　1996年3月31日

編集発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号　埋蔵文化財課
〒810　☎092-711-4667

印 刷 所：松井印刷株式会社
福岡市博多区板付６丁目９番２号
〒816　☎092-593-1770

NISHIJIN MACHI RUINS 4

Excavation Report of
Jar burials and Pit dwellings
in Fukuoka City



March 1996

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

Japan